秋田県文化財調査報告書第176集

根羽子沢遺跡発掘調査報告書

――国道107号線改良工事に伴う緊急発掘――

1988・3

秋田県教育委員会

序

国道107号は日本海側と太平洋側を結ぶ重要な道路です。この道路の改良工事によって秋田県平鹿郡雄物川町大沢に所在する根羽子沢遺跡の一部（南部）を削り取る計画が立てられました。そこで秋田県教育委員会は遺跡の保存のため協議を重ねましたが、遺跡の東西の工事が進んでいることなどから、工事の計画変更は不可能であるという結論に達し、緊急発掘調査を実施することになったものです。

調査には町教育委員会、町立郷土資料館、県立博物館の協力を得て実施したものです。調査面積は340㎡とせまいものでしたが縄文時代後期初めの竪穴住居跡一棟をはじめ土壙、柱穴群などの遺構、縄文時代前期末及び後期初めの土器、石器が数多く出土しています。

それらを報告書としてまとめたものが本書です。根羽子沢遺跡に新らしい事実が加わり本遺跡の価値はさらに高くなったものと考えられます。本報告書が残った遺跡の保護などに活用していただければ幸甚です。

最後に発掘調査ならびに整理作業にご協力いただいた関係各位に対しまして心から感謝の意を表します。

昭和63年3月

秋田県教育委員会

教育長　斎藤　長

例　　言

1. 本書は昭和63年5月18日～5月31日まで国道107号の改良工事に伴って発掘調査を実施した発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は原因者である秋田県土木部の経費負担によって実施したもので総経費3,376,183円で実施した。
3. 本書の執筆・編集は冨樫泰時がおこなった。
4. 遺構等の土層標記にあたっては「新版標準土色帖」を参考にした。
5. 石質については秋田県立博物館学芸主事佐々木厚氏の協力を得た。

目　　次

序

例　言

第１章　は　じ　め　に……1

　第１節　発掘調査に至るまで……1

　第２節　調査の組織と構成……1

第２章　遺跡の立地と環境……2

　第１節　遺跡の立地と環境……2

　第２節　歴史的環境と周辺の遺跡……2

第３章　発掘調査の概要……6

　第１節　調 査 の 方 法……6

　第２節　調 査 の 経 過……6

第４章　遺 構 と 遺 物……11

　第１節　検　出　遺　構……11

　第２節　出　土　遺　物……22

　　１．土　　器……22

　　２．石　　器……33

第５章　ま　　と　　め……42

挿図・図版目次

第１図　遺跡の位置図・周辺遺跡図
第２図　調査区全体図
第３図　遺構全体配置図
第４図　SI01竪穴住居跡実測図
第５図　SI01竪穴住居跡出土遺物
第６図　SK01～04実測図及び出土遺物
第７図　SK05、06実測図
第８図　SK06、SK08出土遺物
第９図　SK07実測図
第10図　SK07出土遺物
第11図　SK08、09実測図
第12図　SK09出土遺物
第13図　SK10、11実測図
第14図　SK11出土遺物
第15図　SK12及び出土遺物
第16図　集石実測図
第17図　遺構外出土土器
第18図　〃
第19図　〃
第20図　〃
第21図　〃
第22図　柱穴内出土遺物
第23図　〃
第24図　遺構外出土石器
第25図　〃
第26図　〃
第27図　〃
第28図　〃
第29図　〃
第30図　柱穴内出土石器

表１　石器出土地等一覧表
グラフ　土器底部の大きさ

図　版
図版１　遺跡遠景、調査区東側、SI01
図版２　SK01、SK02、SK07
図版３　SK09、SK12、SK12土器出土状況

第1章　は　じ　め　に

1.　発掘調査にいたるまで

第１節　発掘調査に至るまで

雄物川町大沢字根羽子沢に所在する根羽子沢遺跡は、秋田県の遺跡台帳№751として周知されている遺跡である。昭和62年12月刊行の『秋田県遺跡地図（県南版）』の新登録№では60―25となっているものである。

この遺跡に接して南側に国道107号線が東西に走っている。今回の発掘調査はこの国道107号線の改良工事（拡幅）に伴って一部削りとられることになり、秋田県土木部道路課と協議を重ねた結果、諸般の事情により緊急発掘調査で対応することになったものである。

調査は秋田県教育委員会が主体となり、雄物川町教育委員会及び同町立歴史民俗資料館の協力を得て進めることになった。昭和62年４月20日付けで文化庁長官あて「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出し、昭和62年５月18日から発掘調査を実施したものである。

第２節　調査の組織と構成

1.	遺跡の所在地	秋田県平鹿郡雄物川町大沢字根羽子沢
2.	調査期間	昭和62年５月18日～昭和62年５月31日
3.	調査対象面積	340 ㎡
4.	発掘調査面積	340 ㎡
5.	調査主体	秋田県教育委員会
6.	調査員	秋田県教育庁文化課学芸主事　冨樫泰時 秋田県立博物館学芸主任　圦内昭男 雄物川町教育委員会主事　金田伸一
7.	調査事務担当者	秋田県教育庁文化課主事　渡辺安則
8.	調査作業員	大和谷哲治、佐々木政吉、高橋芳雄、大和谷長右エ門、福岡芳太郎 佐藤嘉太郎、深川専之助、小野茂治、佐藤喜一、畠山総一郎、六鎗容子、中村千鶴子、佐藤輝美、福岡典子、佐々木裕子
9.	整理作業員	六鎗容子、佐藤充子、中村千鶴子、菊地イセ子、佐々木裕子、土田寿子
10.	協力者	雄物川町、雄物川町教育委員会、雄物川町立歴史民俗資料館、島田亮

三、佐藤克子

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地と環境

雄物川町は秋田県の内陸南部、横手盆地中央の西端に位置し、総面積79.39㎢、人口およそ12,500人の町である。町は雄物川をはさんで東側には水田が開け、西側は出羽丘陵に連なる山間地帯となっている。この山麓丘陵地には果樹園、西瓜畑が開け、町の特産品の一つとなっている。

遺跡は北緯39°16′、東径140°23′に位置し、雄物川の左岸標高59ｍの台地上にある。遺跡の存在する台地は幅（東西）50ｍ前後、長さ（南北）500ｍほどで南々東に舌状にのびた台地である。台地の西側に根羽子沢が北方丘陵部から流れ出て遺跡の直ぐ西側でさらに西北から流れ出てきた上法字川に合流し、国道105号線の下を横切って流れ、蛇行しながら雄物川に注いでいる。

遺物は台地の中央部から先端にかけて分布し、それらは縄文時代前期（大木４～６式）、中期末（大木10式）～後期初頭のものである。

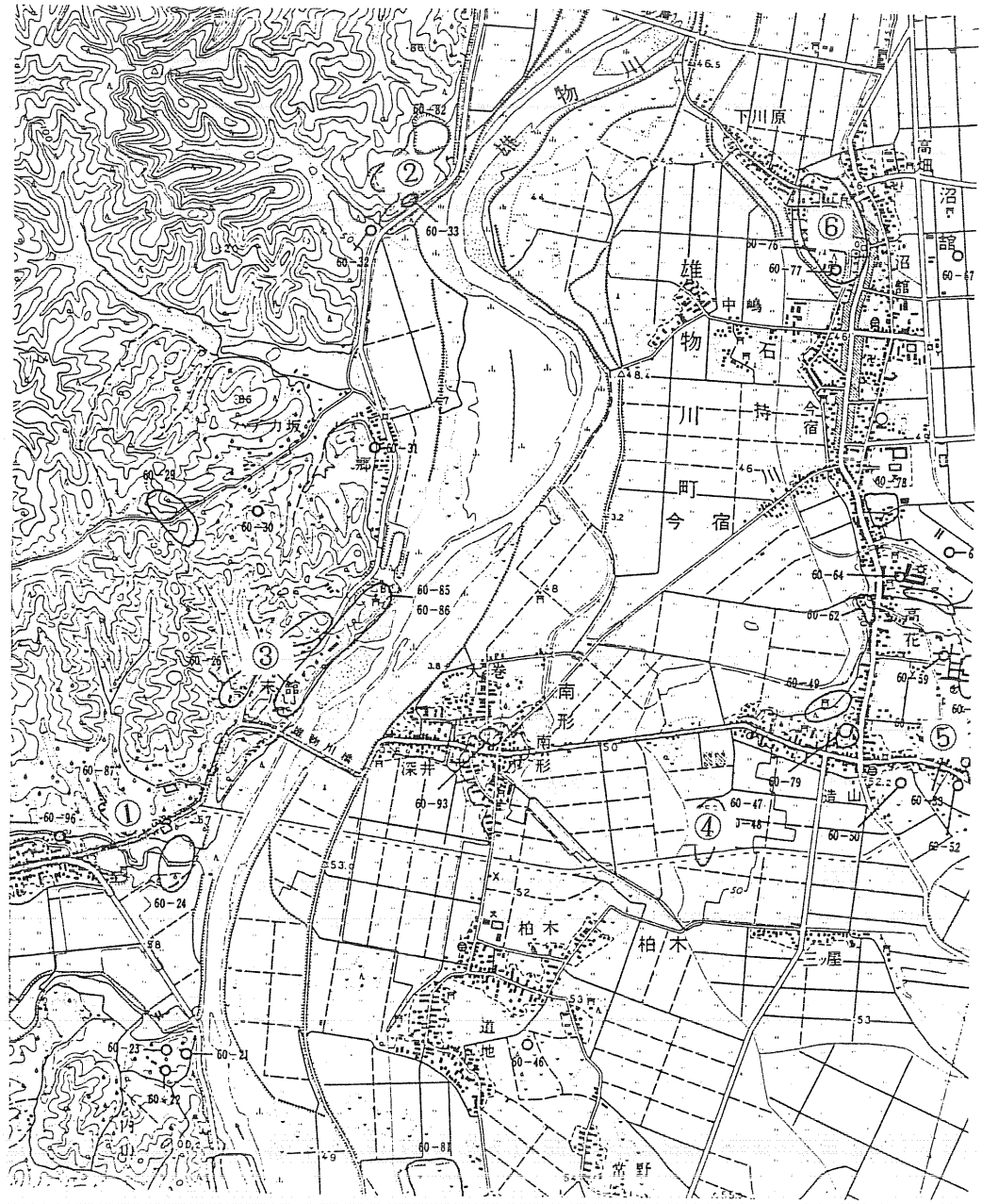
昭和30年雄物川町教育委員会並びに県立沼館高等学校（現雄物川高校）社会科クラブが奈良修介氏、豊島昂氏の指導を得て発掘調査し、縄文時代前期（大木４式）の配石遺構二基検出したのは今回調査した地点より150ｍほど北方東斜面であるという。（注１）また昭和61年度には、土地所有者が西瓜栽培に伴って配石遺構と思われる遺構が破壊されるということで町教育委員会が緊急発掘調査を実施した地域は、やはり今回調査した地点より150ｍほど北方西斜面である。この調査で大型住居跡などが検出された。（注２）遺跡のある台地には北に進む農道が一本央部を走っており、他に佐々木義隆家とその奥の農道をはさんで小屋が二棟存在するだけで他はすべて畑地である。

注１　『秋田県史・考古編』秋田県、1960、奈良修介、豊島　昂『秋田県の考古学』吉川弘文館、1967

注２　『根羽子沢遺跡発掘調査報告書』雄物川町教育委員会、1987

第２節　歴史的環境と周辺の遺跡

秋田県の内陸南部平鹿郡の西部に位置し、町名の由来となっている雄物川が町の中心を南北



1．根羽子沢遺跡　　4．蝦夷塚古墳群

2．兵部ケ沢遺跡　　5．廻館Ⅰ遺跡

3．未館窯跡　　6．沼館城跡

廻館Ⅰ遺跡

第1図　遺跡周辺地形図

に流れ、この川の東方は平垣な水田地帯、西方は出羽丘陵に連らなる山間畑作地帯である。

このような地形的な条件のよい雄物川町には旧石器時代から人が住み、縄文時代、弥生時代古代、中世とそれぞれの時代の人びとの生活舞台となってきたのである。現実にそれらを物語る多くの遺跡が確認されている。

旧石器時代から縄文時代の遺跡は雄物川の西方丘陵地帯に分布している。その主なものをあげると、旧石器時代の遺跡としては新道Ⅰ遺跡（大沢字新道）があり、石刃２点、尖頭器１点検出している。(注１) また南の羽後町足田には新成遺跡があり、ここからはナイフ形石器（東山型）掻器、石刃などが検出されている。(注２)

縄文時代の遺跡としては、この根羽子沢遺跡が早くから知られていたことは前記したとおりである。この遺跡は縄文時代前期末、中期末、後期初めの時期に生活した根跡のある遺跡である。この他発掘調査された遺跡として兵部ケ沢遺跡（沼館字兵部ケ沢）がある。この遺跡は雄物川の左岸段丘上にある。総合運動公園の駐車場造成の時（1957）に緊急発掘調査が実施され縄文時代後期後半のコブ付土器、晩期前半の亀ケ岡式土器、それに土偶などのほか多くの石器などが発見された。(注３)

弥生時代以降になると雄物川の東方平担地も利用されるようになる。弥生時代後期の遺跡として廻館Ⅰ遺跡、十三塚Ⅲ遺跡などがある。

古墳時代の遺跡は現在のところ未確認であるが、横手市オホン清水Ｂ遺跡で５Ｃの竪穴住居跡が確認され、いわゆる古墳時代の遺跡が横手盆地ではじめて確認されたのである。(注４) この事実から考えて雄物川町地域内にも発見される可能性が出てきた。

古代の遺跡では古くから知られている蝦夷塚古墳群（造山字蝦夷塚）、造山遺跡（古墳）どが知られている。蝦夷塚古墳群については菅江眞澄が図を描いて記録した勾玉の出土した遺跡として知られ、その後にもしばしば勾玉などが発見されている。1985年国道107号のバイパス工事に伴っての緊急調査では13基の古墳（円形の溝をもつもの）が確認され、(注５) 少なくとも20基以上の古墳の存在が予想されるにいたった。この時代近くには雄勝城が築かれた時代でもあり、それらと深い関係のある須恵器の窯跡群＝末館遺跡(注６)なども雄物川左岸の丘陵部から発見されている。(注) また平安時代の永延三年（989）銘のある八稜鏡が千刈田（沼館字昼飯塚）から出土している。さらに平野部には12以上の土師器や須恵器を出土する遺跡が確認されており、加えて「沼館」は清原家衡のたてこもった「沼の柵」との説が有力である。

注１　『雄物川町郷土史』雄物川町、1980

注２　豊島　昂、冨樫泰時「秋田県雄勝郡羽後町土館新城発見の石器について」『上代文化33号』1963

注３　『雄物川町郷土資料館第１号』雄物川町教育委員会、1983年

注４　『オホン清水第三次遺跡発掘調構報告書』横手市教育委員会、1984

注５　『蝦夷塚古墳群発掘調査報告書』秋田県教育委員会、1986

注６　大和久震平『平鹿群雄物川町末館窯址発掘調査報告書』雄物川教育委員会、1963

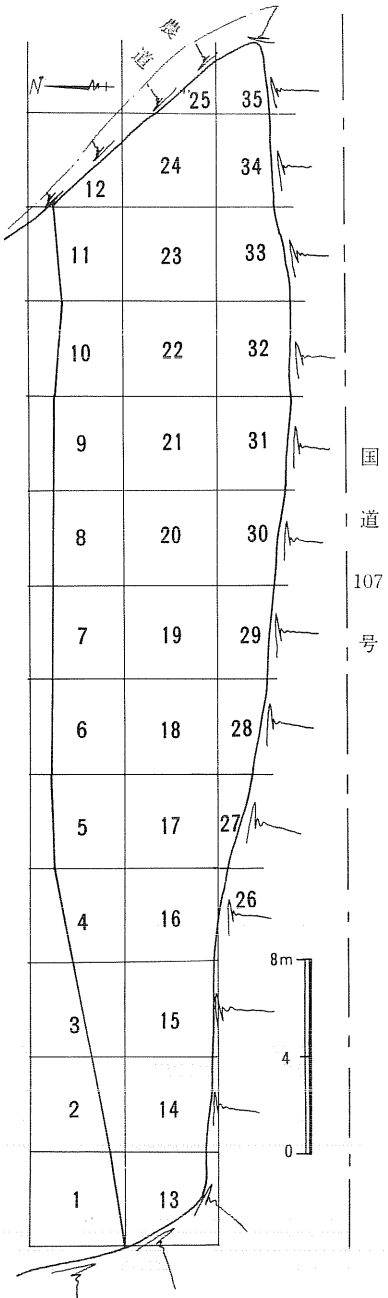
第３章　発掘調査の概要

第１節　調査の方法

発掘調査は県土木部の工事計画で破壊される遺跡の部分に第２図のように４ｍ×４ｍのグリッドを設定し、南北線は磁北として設定した。グリッド名は組合せとせず北の西側から東に１～12、13～25、26～35というように呼ぶこととした（第２図）。

実測は原則として1/20の縮尺とし、遺構の大きさなどによって1/40、1/10で実測をした。又遺構の名称は住居跡――SI、土壙――SKとし、遺物の出土した柱穴にはＰNo.として遺物に注記した。ただし報告書には整理し直したもので報告してあるので調査時のNo.とは異なる。

また発掘調査には一人の調査員が調査期通して調査できない状況であったので調査員三名で日誌等を用いて連絡を密にして実施した。



第２図　調査区全体図

第２節　調査の経過

５月18日、くもりのち晴、８時30分発掘現場集合、発掘用具等を運搬、グリッドを設定し、２～８、14～20、27～29の各グリッドの表土を除去。９は半分ほど除去。５グリッドには新らしい時代の溝、８、20グリッドにも遺構らしい痕跡を確認、９グリッドから縄文土器など他のグリッドに比較して遺物が多く出土する。（冨樫）

５月19日、晴

前日に引き続き表土除去を続ける。表土の厚さは西側で20cmほど東側で30cm前後である。32グリ

ッドで焼石のまとまりが認められた。後でSI01となる。11グリッドで炭化物粒子の混在したしまりのよい覆土があり遺構の存在が考えられる。(後日調査したところ遺構なし)。20、30グリッドに黒色土の落込みがあり東西、南北に幅50cmのトレンチを入れてみる。後でわかったことだが、これは地山が少し凹んでいて、南側に傾斜していて、自然のものであった。(庄内)

5月20日、くもり

22、32グリッドで確認した焼石は住居跡の炉のものでSI01とし、東西線のベルトを残し、覆土を除去、覆土内に炭化材、焼土塊が多く混在し、焼失家屋と考えられる。一部カクラン(リンゴの木の跡か)もある。5、6、7グリッドの溝を追求、耕作のものとわかる。17、18グリッド褐色土層を掘り下げる。(庄内)

5月21日、晴

15、16、17グリッドの1層下、Ⅱ層を掘り下げる。遺物があり、土壙らしき遺構2基、南端で焼土確認、SI01の壁及びその周辺を精査。(庄内)

5月22日、晴

33、32グリッドに確認された土壙4基実測、土層断面をとる。写真撮影も終了しこの遺構の精査終了。SI01の壁を追求。北壁に木炭、石の張り付けの状態が観察された。北壁の木炭は壁に横に張り付けた板状のものであることがわかった。これからも焼失家屋であることが推測される。30、31グリッド地山まで掘り下げる。自然の谷のようになっていた。2、13、14グリット地山面まで掘り下げる。13グリッドに焼土確認、遺物も少しあり。(冨樫)

5月23日、雨のちくもり

SI01の表土からの土層断面図をとりベルトをはずす、20グリッド発掘。半日の調査。(冨樫)

5月25日、くもり

SI01の床面精査、21グリッド精査、SI01の写真撮影、17、18グリッドから集石と思われるもの検出、写真撮影。(庄内)

5月26日、雨

崖縁に残していたベルトを除去。4、5グリッド2層面を発掘、土壙らしき遺構あれどはっきりせず。雨つよくなり午後作業中止。(庄内)

5月27日、くもり

西側の1～4、13～16グリッドを精査、この地区から柱穴が沢山検出される。大きく東側全体の様子を写真撮影、SI01の写真撮影、またSI01の平面図、断面図をとる。(庄内)

5月28日

SI01の実測し残した断面2本実測。18グリッドに集石、13グリッドに住居跡らしい遺構確認19、29グリッド地山まで掘り下げる。18、28グリッド精査を続ける。土壙3基精査。(冨樫)

5月29日、はれ

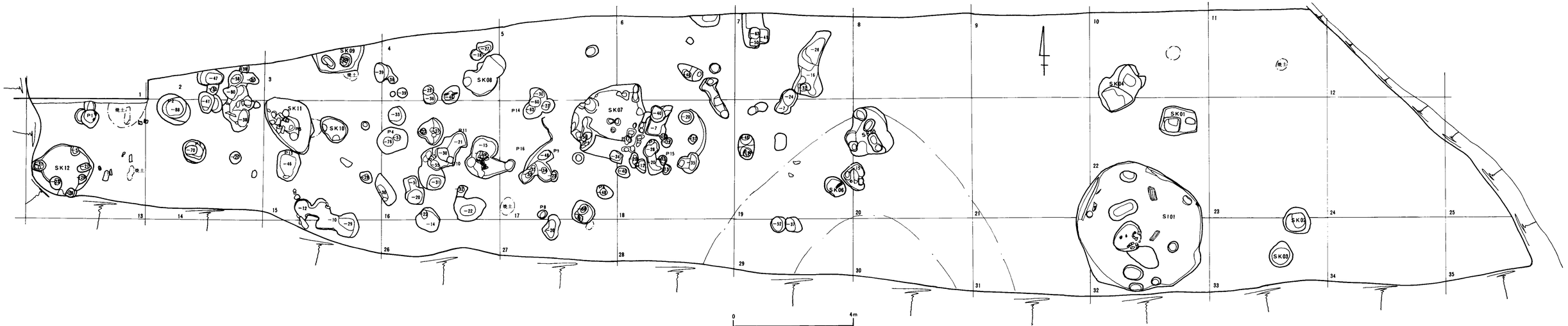
18グリッドの集石実測、写真撮影、その下を発掘したが集石の下に土壙と思われる遺構は確認できず。13グリッドの住居跡らしい遺構も追求すれど不明確。その下から土壙を確認。14～19までのグリッドで確認された土壙、柱穴群の精査。（冨樫）

5月30日、はれ

昨日精査、発掘した6、18グリッドより西側の土壙、柱穴群など実測しながら精査、柱穴群では同一のものと思われるものもあるが遺構が重復しているのと、発掘地が細長いため全体をつかみきれないまゝ終了。（冨樫）

5月31日、はれ

昨年実測しきれなかった2、3、13～15、18グリッドの遺構の実測、写真撮影をおこない調査は終了した。


SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK07
SK08
SK09
SK10
SK11
SK12
S101
P1
P4
P5
P8
P9
P11
P12
P14
P15
P16
焼土
0
4m

第3図　遺構全体配置図

第4章　遺構と遺物

第1節　検出遺構

発掘調査地域は遺跡の中でもっとも遺構等の多い台地の縁辺部であったため、発掘調査面積が340㎡とせまい割に遺構が多く検出された。検出遺構は竪穴住居跡1棟（SI 01）、土拡12基集石などである。14～18グリッドの間に多くの柱穴が検出された。また焼土などもいくつか検出され、竪穴住居跡の遺構と推測されるが、調査する範囲がせまくまとまりのある遺構として確認し得たかったので全体図として示し、後日何かの機会に北側の調査が実施される時、あわせて検討していただきたいと思う。

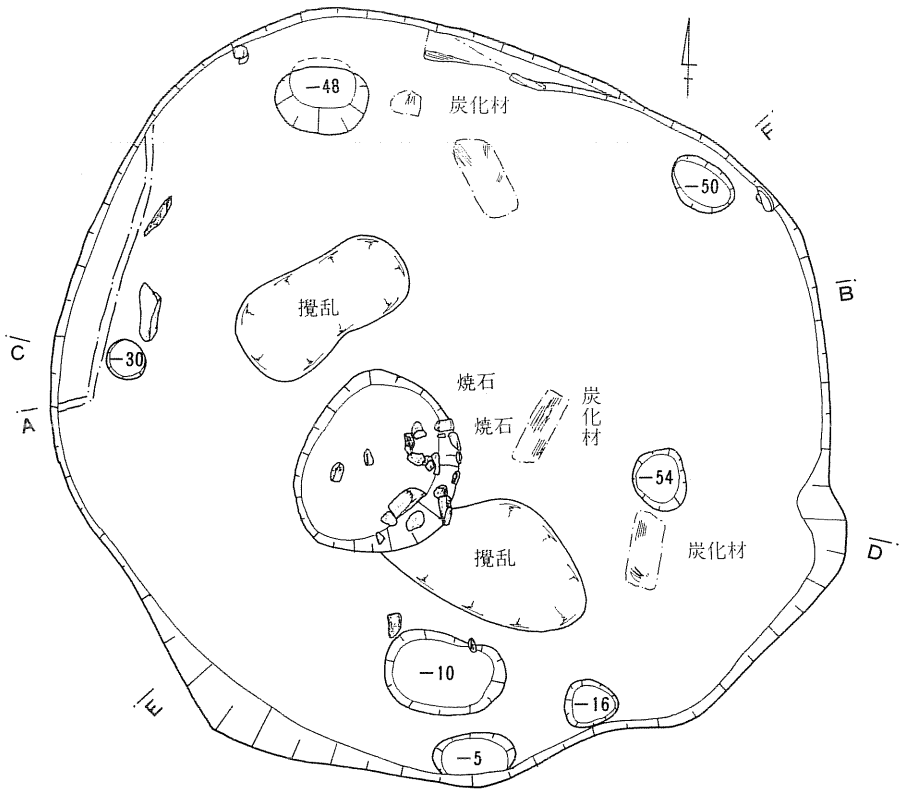
SI01（第4図、図版1）

22、32グリットを中心に検出された住居跡である。平面形は直径4,2 m前後の円形に近い形態を呈す。炉跡は住居の中央より少し南西に位置し、楕円形に掘込んで作っている。掘込みの大きさは長径100㎝、短径90㎝で深さは25㎝ほどである。掘込みの東側に自然石を配置している。柱穴は不規則で深さ30㎝以上のものが主柱穴と推測される。深さ5㎝、16㎝の柱穴は入口施設と考えられる。床面は炉跡の東北が最も良好で硬いが、ほかは全体的に軟かい。壁は地山から10㎝～20㎝の高さで北壁から西壁にかけての壁は発掘調査では非常にわかりにくい状況であった。それは次のような原因によるものと考えられる。竪穴住居を作るために地山を10㎝～20㎝の深さで円形に掘る。その後壁ぎわに板あるいは扁平な石をあてる。板や石と壁との間にできたすき間に掘った地山の土（ローム）を埋めるのである。したがって住居の実際の大きさは20㎝前後せまくなるものと推測される。このようなことが北壁で掘り方の壁の内側に炭化した板が壁と平行に観察でき、またその東側に扁平な石が張り付けられていた。また西側の深さ30㎝の柱穴の所の壁でも同様な状態が観察できた（断面図A～B参照）。

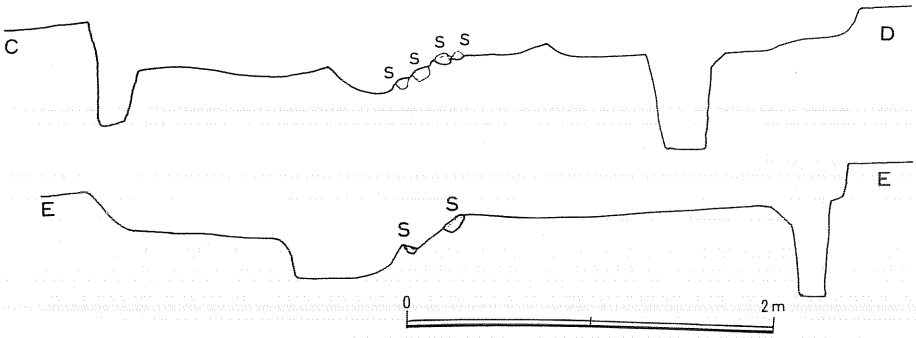
埋土及び床面から若干の土器、石器が出土している（第5図）、1は口縁部の破片で口縁直下に小さなコブが付き、中心に円形の刺突がある。2～4は指頭圧痕文が連続して施した土器で第21図5と同一個体と思われるほどよく似ている。7は櫛状工具で施した沈線文、8はLRの縄文の施したものである。

これらの遺物は後期初頭に位置づけられ、この竪穴住居跡もその時期のものと考えられる。またこの住居跡は発掘調査の過程で床面及びその直上で炭化材、焼土など多く検出された。また壁材として使用された板なども炭化して残っていることから火災にあった住居と考えられる。根羽子沢遺跡から後期初頭の竪穴住居跡が確認されたのははじめてである。

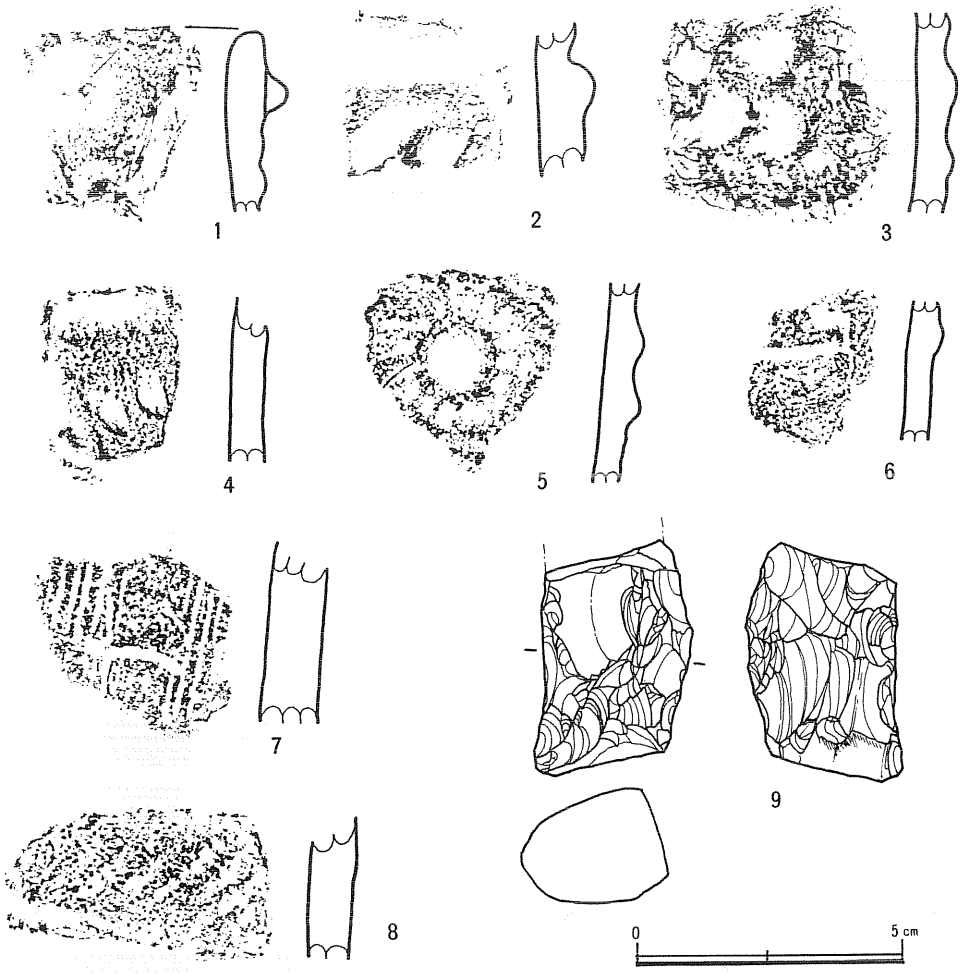
SK01　（第6図、図版2）



1．黒色土（表土）
2．黒褐色土
（木炭少し含む、10YR3/2）
3．灰黄色土（10YR4/2）
4．黄褐色土（10YR5/1）
5．暗褐色土
（木炭多く含む、10YR3/4）
6．黄褐色土（10YR5/4）
7．暗褐色土(木炭混り、10YR3/4)
8．褐色土（10YR4/4）
9．黒褐色土（10YR2/2）
10．7と同じ
11．ロームのブロック
12．黒褐色土
（木炭多く含む、10YR2/2）
13．褐色土(木炭少し含む、10YR4/4)
14．黒色土（10YR2/1）
15．焼土（木炭を含む）
16．褐色土（10YR4/6）
17．黒褐色土（10YR2/2）



第4図　ＳＩ01竪穴住居跡実測図



第5図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物

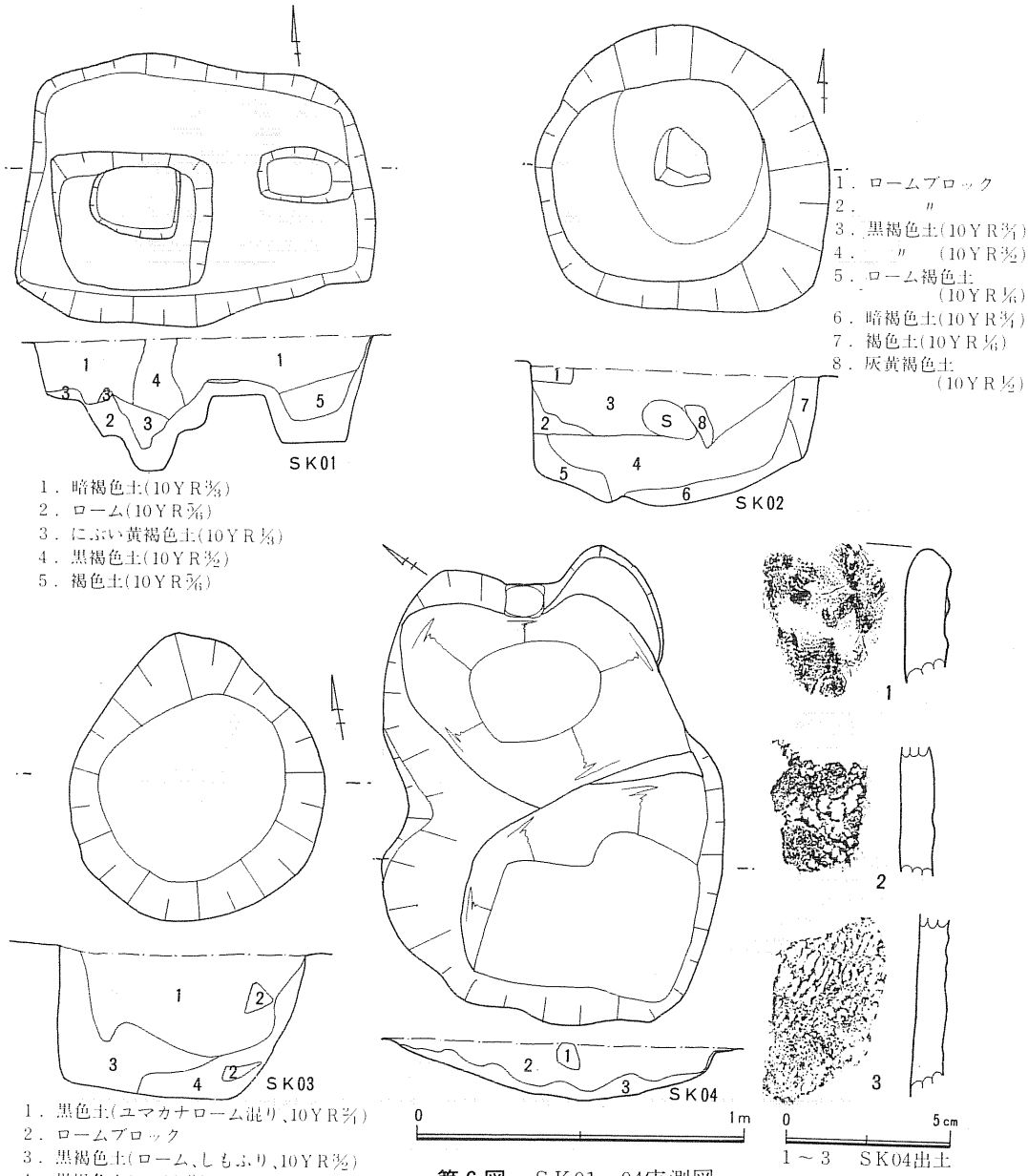
22グリッドの北東側に検出された土壙である。平面形は長方形で長径107㎝、短径80㎝、深さ180ｍである。土壙の中に3個の穴があり、いずれも長方形を呈す。中の土層の観察から見ても土壙の中の穴も同一時期のものとしてよいと思われる。出土遺物なし。埋土は図のとおり

SK02（第6図、図版2）

23、33グリッドの境界線上の東側に検出された土壙である。平面形は上面（確認面）で直径87㎝の円形で床面の平面形が隅丸方形に近い形を呈す。深さ47㎝ほどある。土壙のほぼ中央、床面より15㎝ほど上位に人頭大の石が2個存在した。遺物はまったくなし。埋土は図のとおり

SK03（第6図）

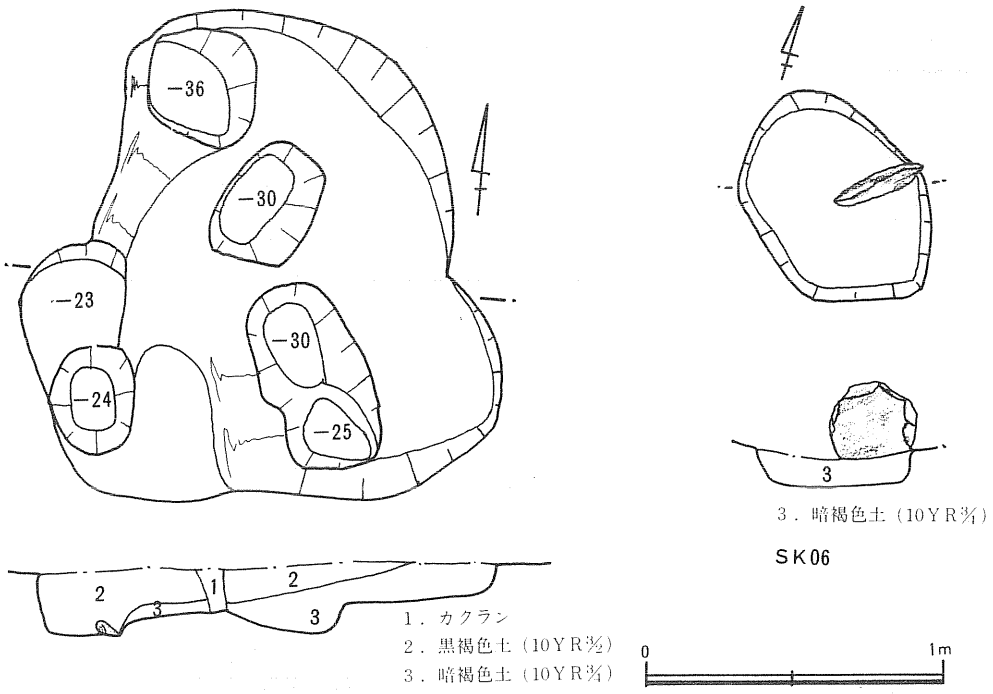
33グリッド中央北側に検出された土壙である。平面形は楕円形で長径90㎝、短径80㎝である。出土遺物はまったくなし、埋土は図のとおりである。



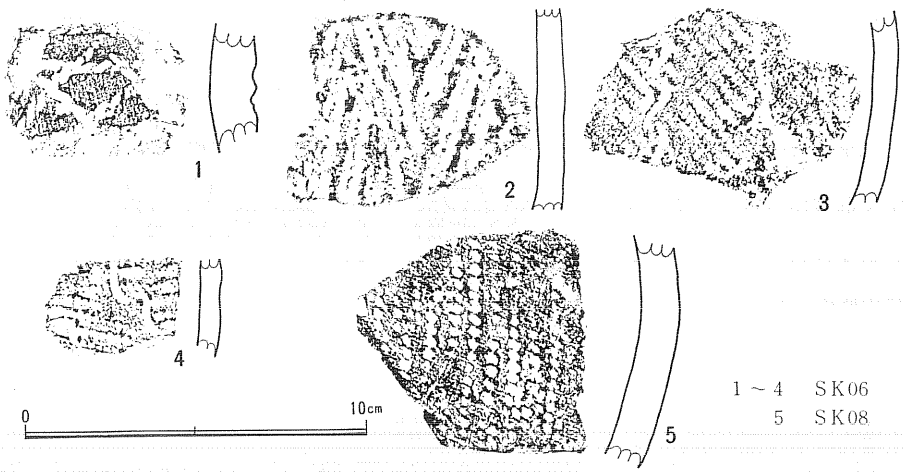
第6図 SK01～04実測図

SK04 （第6図）

10、22グリットの境界線上の西側に検出された土壙である。二つの土壙と考えられるものである。北側（図の上方）は南北に長い楕円形を呈し、大きさ長径約80cm前後と推測され、短径は70cm前後と推測される。床面の形は楕円形である。南側（図の下方）は不整の長方形と推定され、長径100cm、短径70cmと推測される。中から図示した縄文前期後半の土器が出土した。1は口縁部の破片である。地に縄文を施しその上に粘土紐を鋸歯状に貼り付けたもので大木4式の土器である。2は結節の羽状縄文3は多軸の絡条帯を施した土器である。



第7図　SK05・06実測図



第8図　出　土　遺　物

SK05（第7図）

20グリッド北西側に検出された土壙である。平面形と土層の断面から推測すると2～3基の土壙が重複しているようにも見えるが調査で明らかにすることはできなかった。中に存在する柱穴様の穴との前後関係についても同様で、SK01同様にこれらの穴も土壙と同一時期のものとも考えられる。全体の大きさは南北150㎝、東西148㎝、深さ22㎝である。出土遺物はな

く、埋土は図のとおりである。

SK06（第７図）

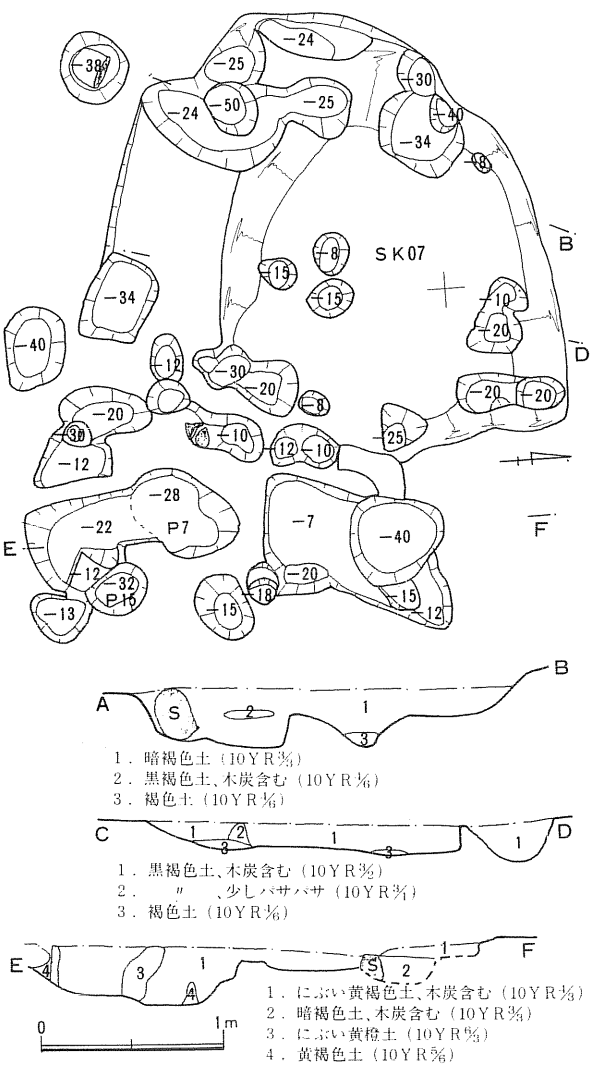
19グリッド南東に検出された土壙である。平面形は楕円形で長径80cm、短径54cm、深さ10cmと浅いものである。土壙中央東側に円形で扁平な石を立っていたのが注目される。出土遺物は第８図にある１～４の土器片である。１は口縁部に近い所の破片で網目文を施した土器片である。この文様は絡条帯なのか、撚糸圧痕によるものなのかはっきりしない。縄はＲである。２は胴部の破片で木目状撚糸文（単軸絡条帯）のものである。この２点はいずれも前期末の土器である。３～４はＳ字状の連続文（縄の端を結節した原体を回転して施した文様）のある土器である。厚体を縦位に回転させており時期については１、２と異なる可能性が強い。

SK07（第９図、図版２）

17、18グリッドの境界線の北側に検出された土壙である。平面形は半円状を呈し、10cm前後の浅く小さい穴が伴う。大きさは南北180cm、東西240cm、深さ12cmほどである。南北の壁は緩傾斜であるのも特徴的である。

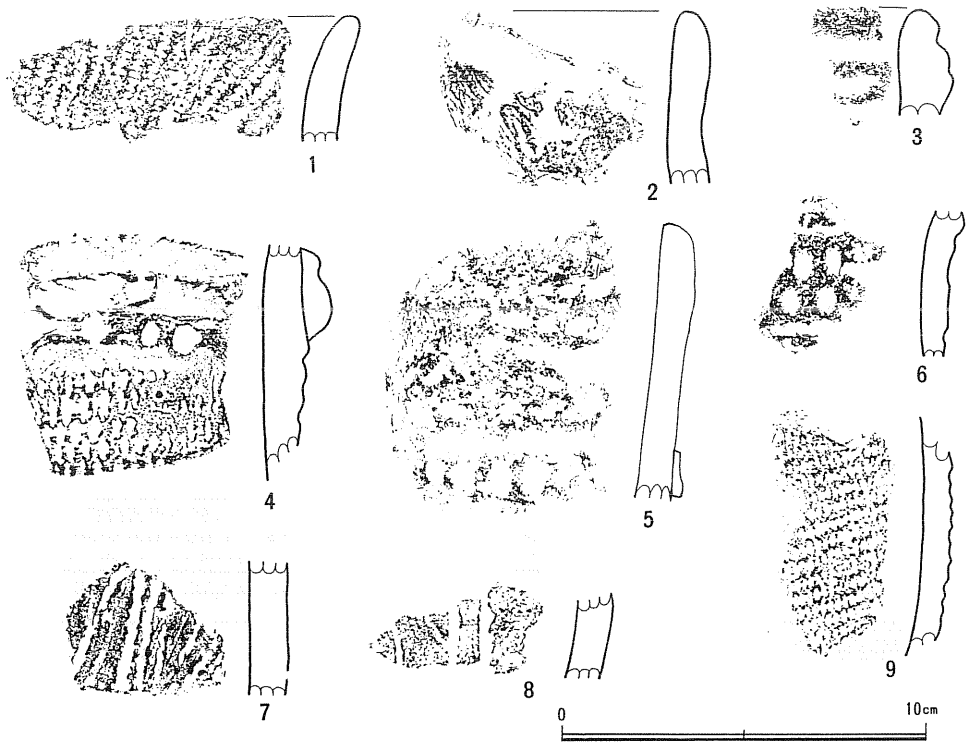
この土壙の周囲に性格不明な柱穴が多数検出された。また第16図のように18グリッドを中心に集石が確認されたが、これらの柱穴、土壙と重なるものとは考えられなかった。

出土遺物は第10図に示したとおりである。１～３は口縁部破片で、１はLRの縄文、２はR{R/R}の縄文？を施したものである。３は口縁部を複合口縁のように外側にふくらみ、その上に太い沈線を施したもの４は頸部から



第９図　ＳＫ07実測図

胴部の破片で頸部に隆帯をめぐらしその上に刺突文を施し、胴部には多軸絡条帯で文様を施した土器である。５は口縁部破片で４同様頸部に隆帯を貼り付け、その上に爪形状の刺突文を施したものである。口縁部文様帯にはっきりしないが縄線文を施しているように見える。７は単軸



第10図　ＳＫ07出土遺物

絡条帯、８は沈線、９は縄文を施した土器である。

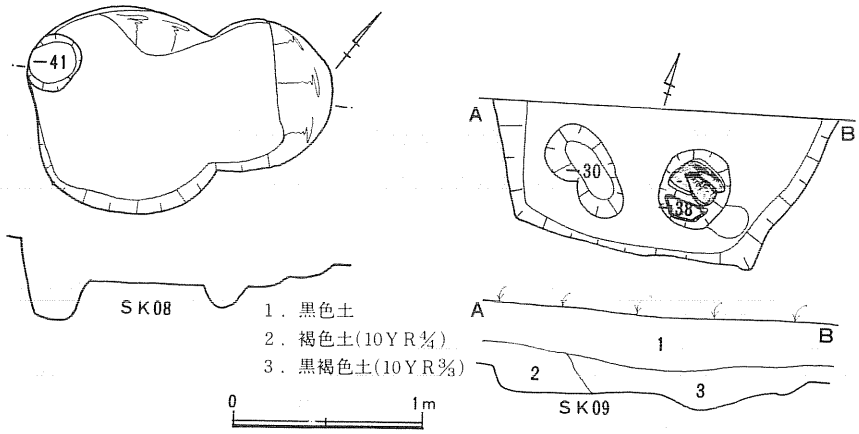
SK08（第11図）

５グリッド東南隅に検出された土壙である。平面形は瓢箪形を呈し、大きさは長径160㎝、短径105㎝、深さ17㎝である。中から縄文を施した土器片１片出土。（第８図５）

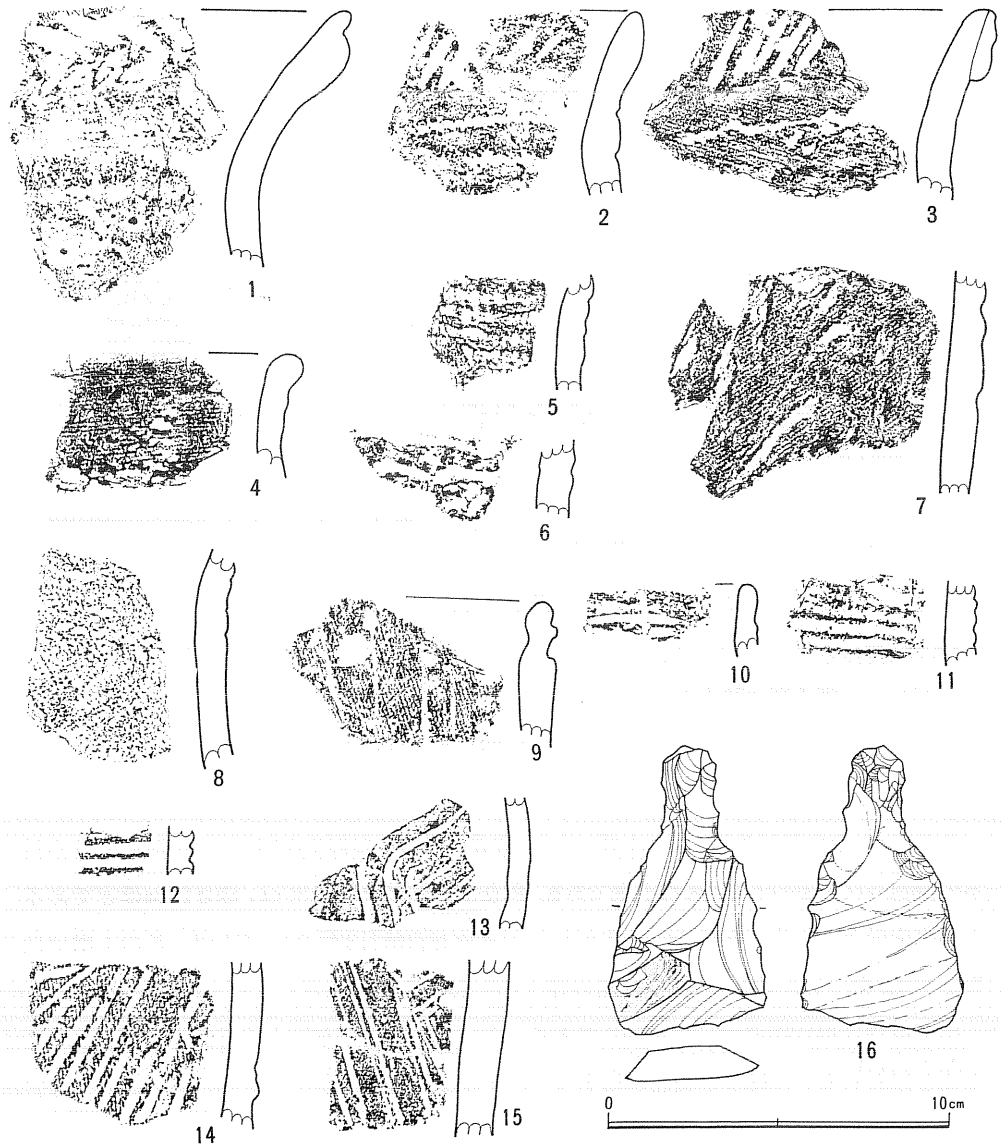
SK09（第11図）

３グリッド中央部に検出された土壙である。北側半分ほど発掘できないので全体の形は不明であるが、台形にしっかりと掘込んだ土壙である。現在の大きさは東西180㎝、深さ20㎝ほどである。中土壙の床面からの深さ30㎝、34㎝の穴がある。一つには自然石３個つまっている。この土壙は他の土壙と形態、掘り方が異なっており性格の違うものであるかもしれない。埋土は図のとおりである。

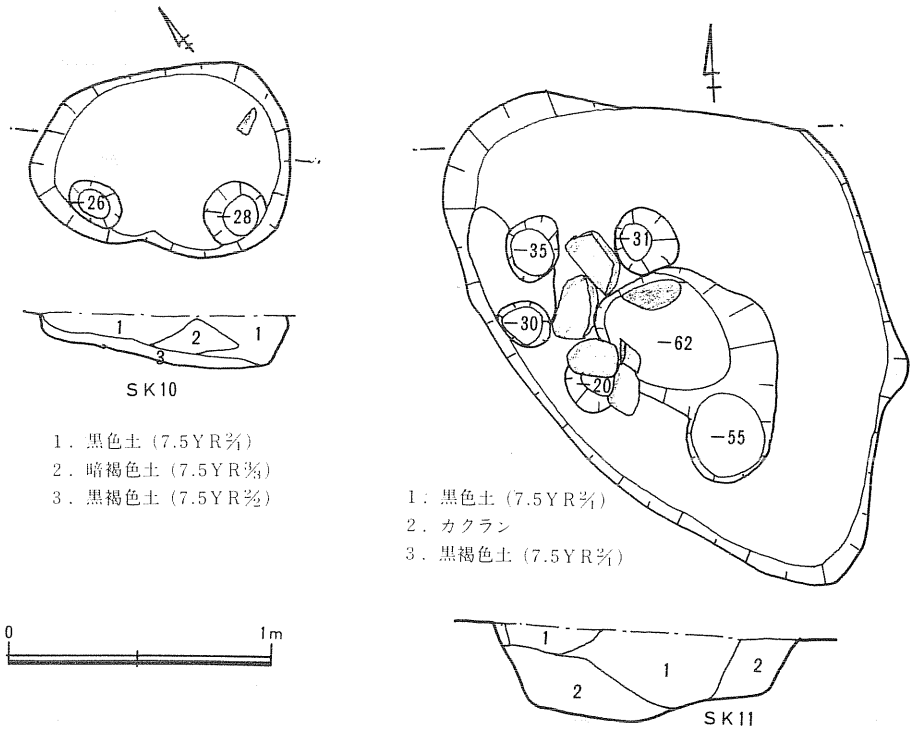
出土遺物は第12図に示したとおりである。１～３は口縁部が大きく外反する深鉢形を呈する土器と思われる。口縁部が複合口縁をなし、その上に棒状工具で１は羽状に、２、３は斜状に沈線を施している。頸部には１、２はＬの縄線文が口縁と平行に施している。３はよくわか



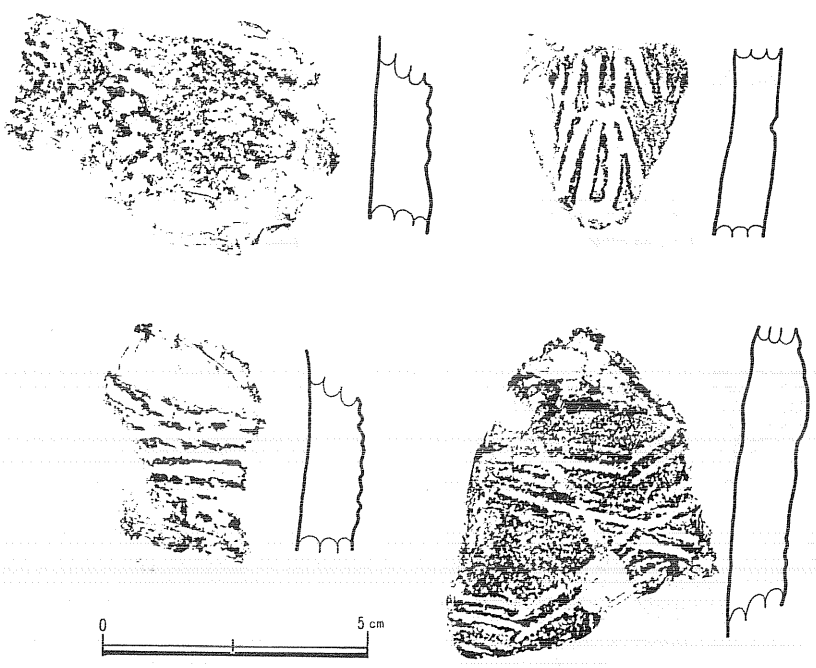
第11図　ＳＫ08・09実測図



第12図　ＳＫ09出土遺物



第13図　SK10・11実測図



第14図　SK11出土遺物

らない。8は1か2と同一個体である。4、5は縄文を施したもの、6はS字状連続文、7は単軸絡条帯（木目状撚糸文）を施したものである。9～15は沈線文を施した土器である。9は波状口縁を呈すと思われる。胎土に少しの繊維を含むものである。10～12は半截竹管による沈線である。13～15は棒状工具（半截竹管か）で沈線を施したもので胎土に少しの繊維を含む土器である。16は頁岩の縦長の石匙である。これらの遺物はいずれも前期末のものと考えられる。

SK10（第13図）

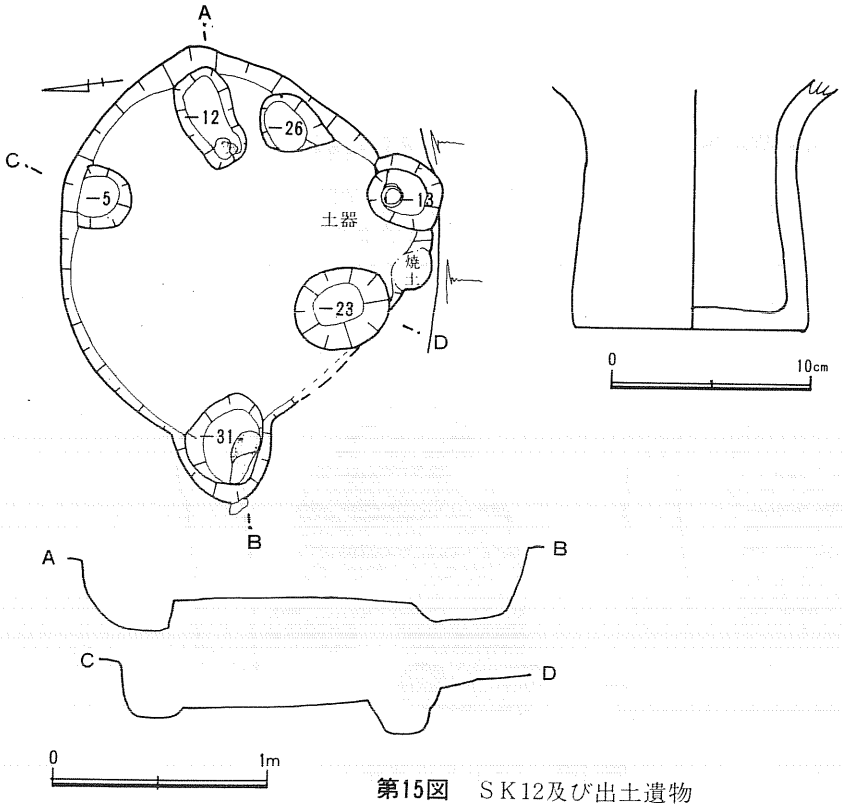
15グリッド中央部北側に検出した土壙である。平面形は楕円形で、大きさは長径100㎝、短径65㎝、深さ20㎝である。中に穴が2個ある。出土遺物はなし、埋土は図のとおりである。

SK11（第13図）

15グリッドの北西隅に険出された土壙である。平面形が隅丸の三角形を呈し、一辺が約200㎝、130㎝、160㎝、深さ30㎝ほどである。土壙の後に柱穴が掘られている。石は柱根を固定するためのものと考えられる。中から4片の縄文時代前期末の土器が出土している。埋土は図のとおりである。

SK12（第15図版3）

13グリッドの南西隅に検出した土壙である。平面形は円形で、大きさは東西200㎝、南北170㎝、深さ20㎝ほどのものである。土壙の壁に沿って6個の穴がある。いずれもこの土壙に伴う



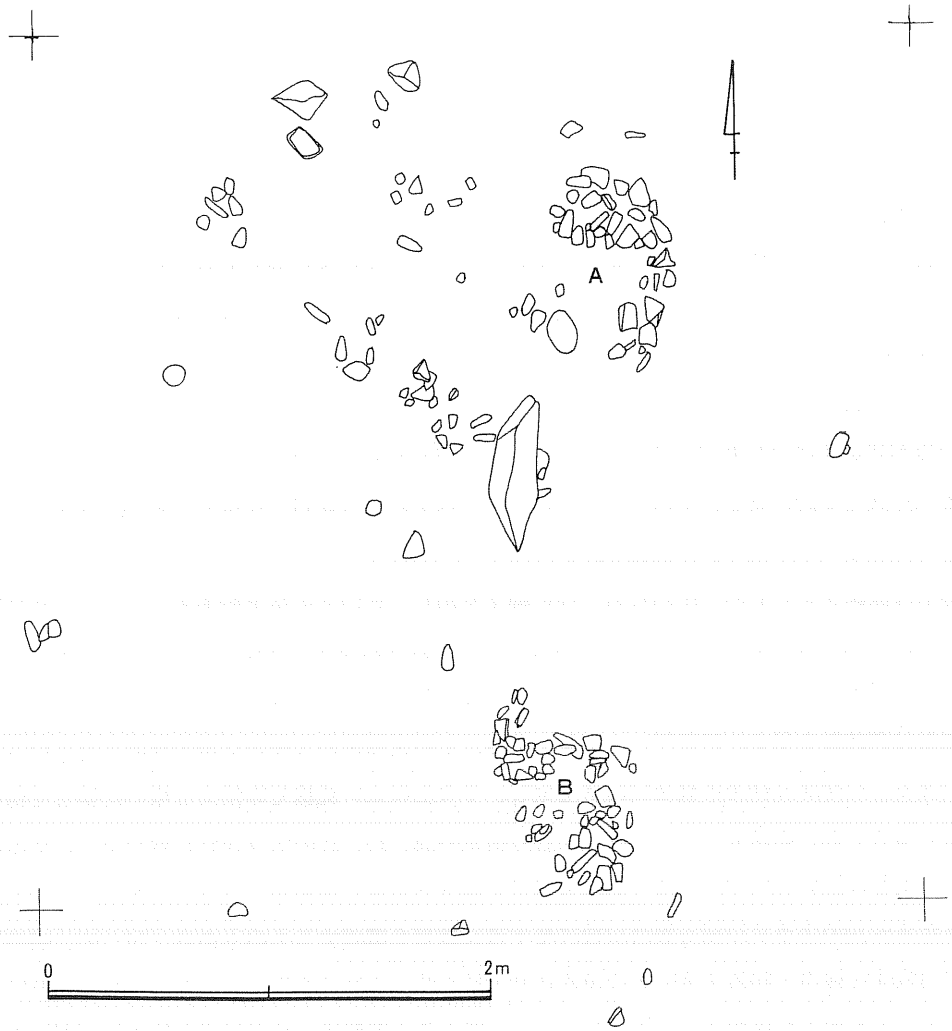
第15図　SK12及び出土遺物

ものと考えられる。南の穴の中には図示した土器底部が埋った状態で出土した。使用された状態を示すものと考えられる。床面はしっかりしている。焼土、炉の痕跡は認められない。

出土した土器は細砂粒を多く含む土器で、底部が筒状に立ちあがり、胴部が大きくふくらむ器形を呈すものと推測される。

集石（第16図）

18グリッドの遺構確認面の直上から第16図のような集石が検出された。とくに集中していをものをA、Bとした。Aは北側にひとかたまりあり2つに細分も可能である。Bも同様である。構成している石はコブシ大のものから人頭大のものまである。この集石の下に土壙が伴うか否か確認したが明瞭に伴うものはなかった。



第16図　集石実測図

第２節　出土遺物

出土遺物はすべて縄文時代のものである。縄文時代前期末、後期初頭の遺物で土器と石器である。その量はコンテナ10箱ほどである。竪穴住居跡、土壙などの遺構内から出土した遺物については前節で説明したのでここでは省く、また遺構とくに柱穴の中から出土した遺物についてはこの節の遺構外の遺物と一諸に説明することにし、図も別にしてある。Ｐ№は遺構配置全体図（第３図）に示してあるのでそれと照合して見ていただきたい。

(1)　土器

遺構外から出土した遺物を一括して説明する。今度の調査で出土した縄文土器は大きく２群に大別できる。その第１群は縄文時代前期の土器群、第２群は後期の土器群である。

第１群土器

第１群土器はさらに細分が可能である。

１類土器（17図１～３）

器表面がザラザラし、胎土に細砂粒を念むものである。１は頸部に粘土紐を貼り、その上にキザミを施したもの、２は頭部に二本の沈線を施し、その下に１と同じような粘土紐が貼られた土器である。３は頸部に山形連続文が不規則に施し、その下に縄文を施したものである。器形は不明だが胴下半分が筒形になり胴部が強く張り出すいわゆる吹浦式土器に近い器形をなすものと考えられる。

第２類土器（第17図４）

口縁が直線的に立ちあがる深鉢形をなすものと思われる。口縁は平で、その下に半截竹管による爪形文を２段に施し、その下には沈線による格子目文（網目）を施したものである。

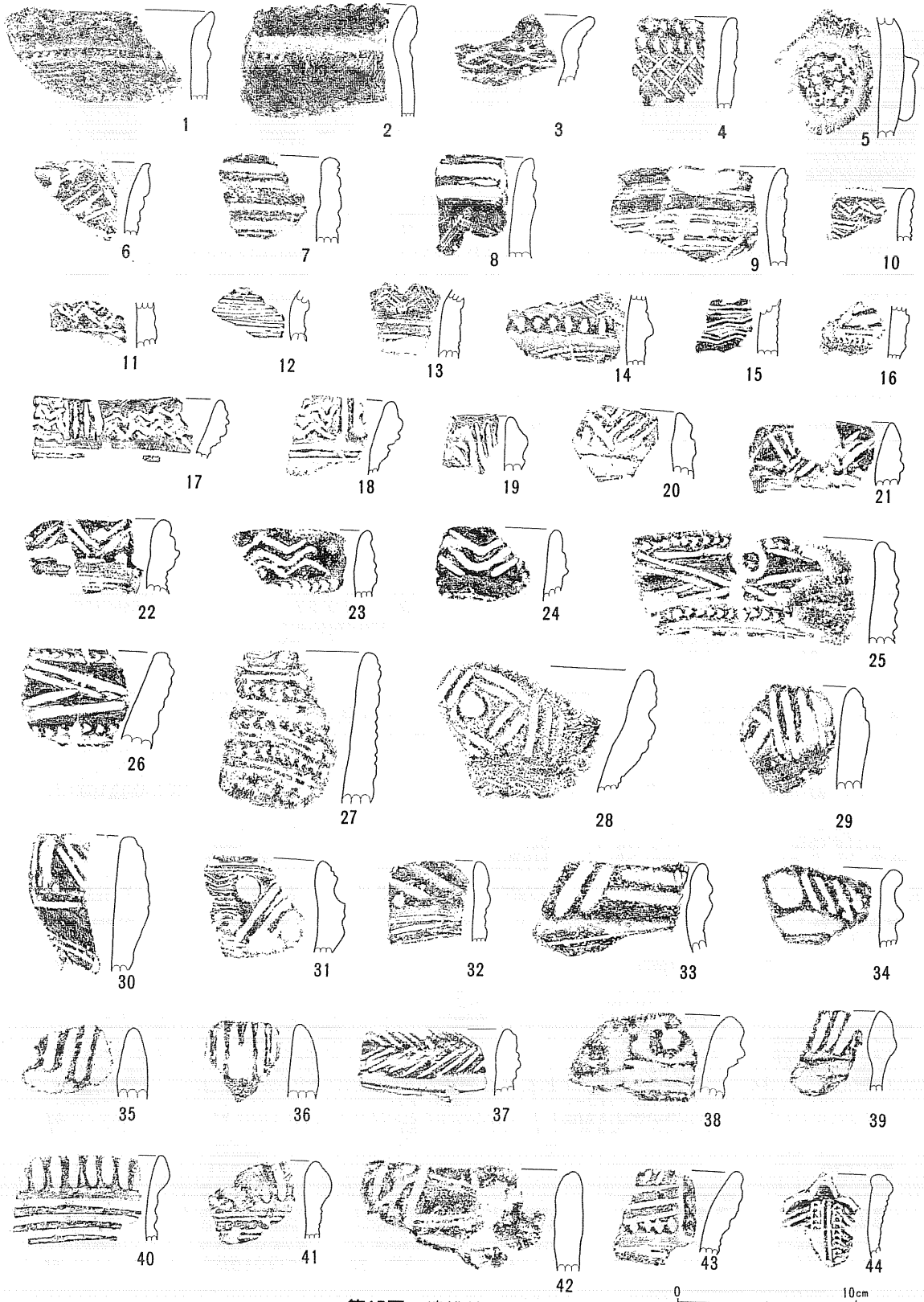
第３類土器（第17図５、第20図127）

器形は深鉢を呈すものと思われる。地に縄文を施し、その上に粘土紐あるいは５のように円盤状の盤状粘土版を貼り付けたもの、あるいは粘土紐を鋸歯状に貼りつけたものである。

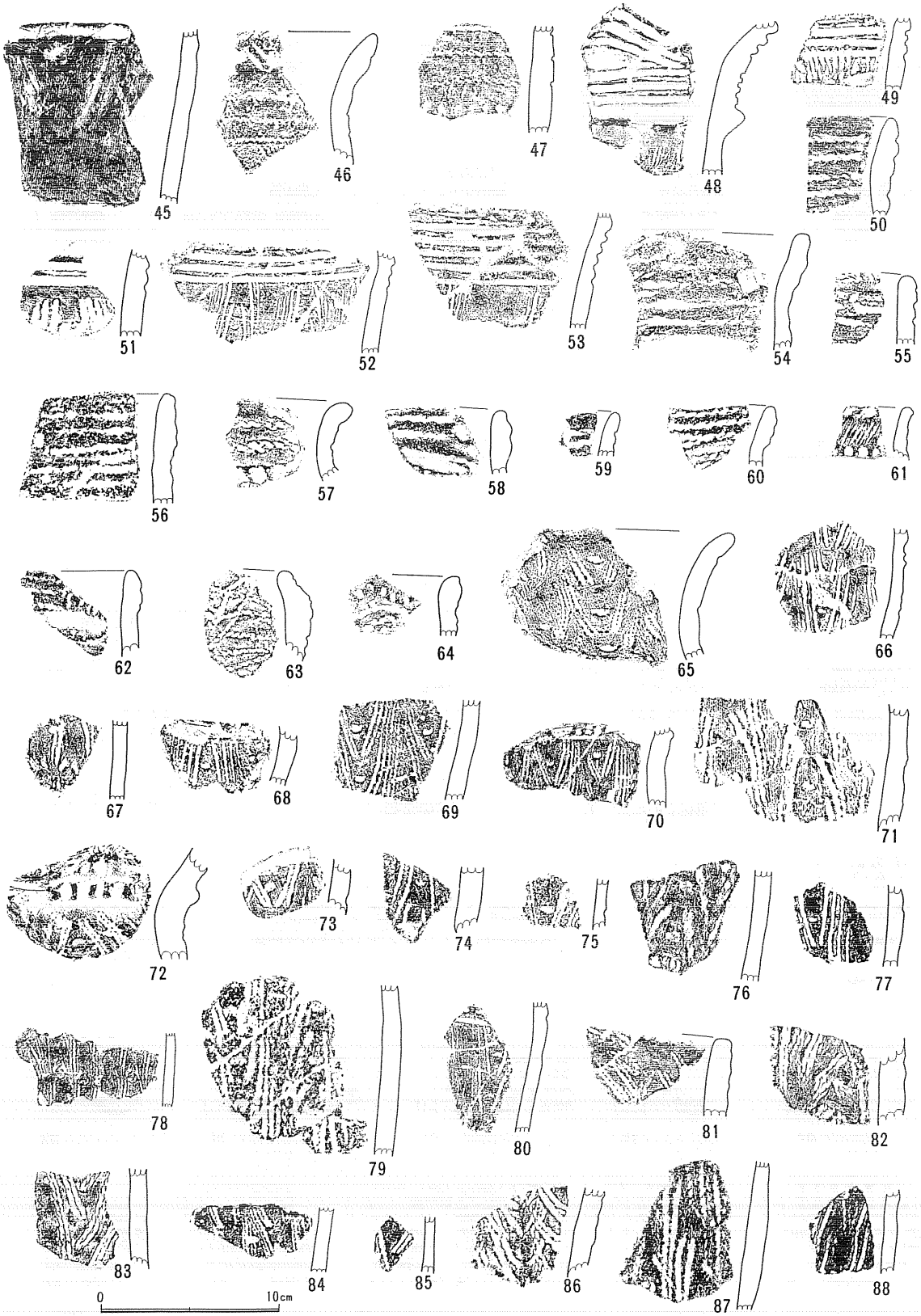
第４類土器（第17図６～44、第18図73～77、第19図65、66、第21図１、第22図１、第23図30、31）

器形は深鉢形を呈す。口縁部に文様帯をもち、その文様帯の文様が沈線で構成されているものである。口縁部文様帯が複合口縁状を呈し、その上に太い沈線で鋸歯文と縦の沈線とで構成している17～20、鋸歯文に円形の刺突文との構成の22、23、28のよう波状口縁を呈し、その波頂部に菱形に囲いその中に円形の刺突文などを施すものなどがある。

また６～10のように口縁を複合口縁にせずに文様帯を構成するものもある。14、43、44のように口縁部文様帯と胴部文様帯との境界に粘土紐を貼りつけて隆帯としたものもある。第21図１がもっとも大きな破片で図上復元できたものである。器形は４つの波状口縁を呈し頸部で少



第17図　遺構外出土土器



第18図　遺構外出土土器

しくびれ、胴部中央で少しふくらむ深鉢形を呈す。口縁部文様帯は複合口縁部のみに施されるものである。25・26・31のように複合口縁のように厚く作られてしかも巾の広い文様帯をもつものもある。また第23図30・31のように頸部に巾の広い文様帯をもつものもあり、第17図の中にもこの仲間と思われるものがある。

この類は文様帯の構成から(1)口縁部文様帯と胴部の文様帯だけのもの、(2)口縁部文様帯と頸部文様帯、胴部文様帯のもの、(3)前(2)の各文様帯の境に隆帯のあるもの、という細分も可能である。

胴部の文様は縄文が主体であると思われるが、中には単軸絡条体を回転して施した木目状撚糸文（第23図30）、半戴竹前による平行沈線文のものもある。

第17図36に楕円形の刺突文のように見えるのは文様ではなく、ドングリのようなものが入っていて、それがとれたためのものである。ドングリ状のものが胎土に入れられていたと思われる破片がこの他１点出土している。

第５類土器（第18図45～64）

器形は第４類同様深鉢形を呈するものと思われる。口縁部の作りも同様で、ただ異なる点は文様が縄文であることである。口縁部文様帯が第４類より巾が広く、複合口縁を呈するものも少ない。縄文は撚糸（ＲもＬもある）を口縁と平行に押捺して付けられたいわゆる縄線文のものが多い。61のように縦の撚糸文のものもある。

第６類土器（第18図65～88、第23図１・11～13）

器形は深鉢形を呈するものである。単軸絡条体による木目状撚糸文を施した土器である。65のように口縁部から文様を施したものもあるがほとんどが胴部の文様として施したものである。撚糸が２本一組のものが多い。撚りはＲもＬもある。65～80のように条の端が反対側に出ているためその圧痕が点状に見られるものと、81～88のように条の端が出ていないため、点状の圧痕の認められないものとがある。85のように木目状撚糸文が交互に中心から出てくるようなものもあり、原体にいくつかの種類がある。

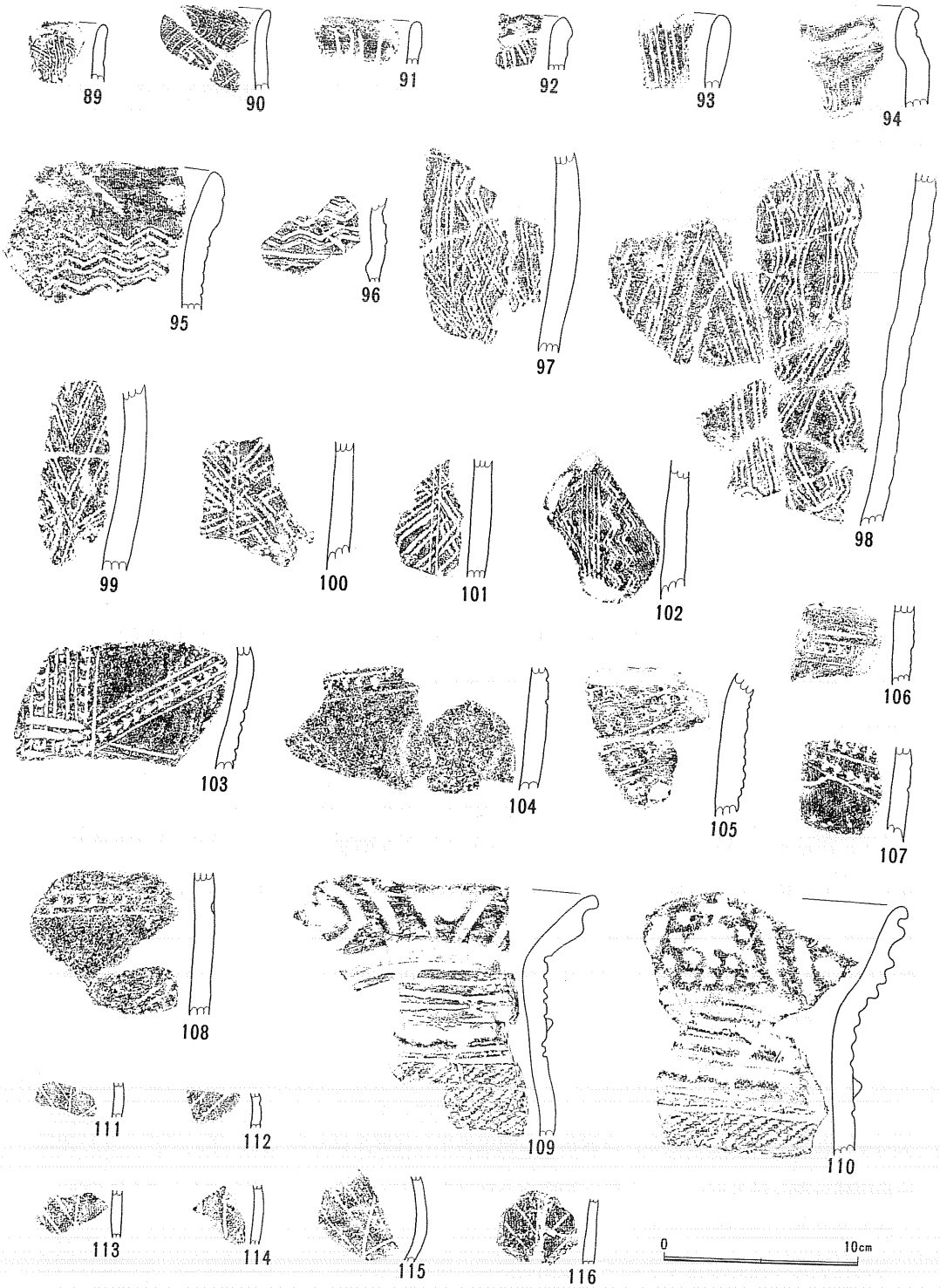
第７類土器（第19図89～102）

器形は深鉢形を呈するものと思われる。大まかにはバラエティがある。文様が半截竹管文による平行沈線文の土器である。口縁部から縦位に平行沈線を施したもの、95、96のように横位に鋸歯状に施したもの、この土器の胴部の文様は97～102のような文様になると思われる。

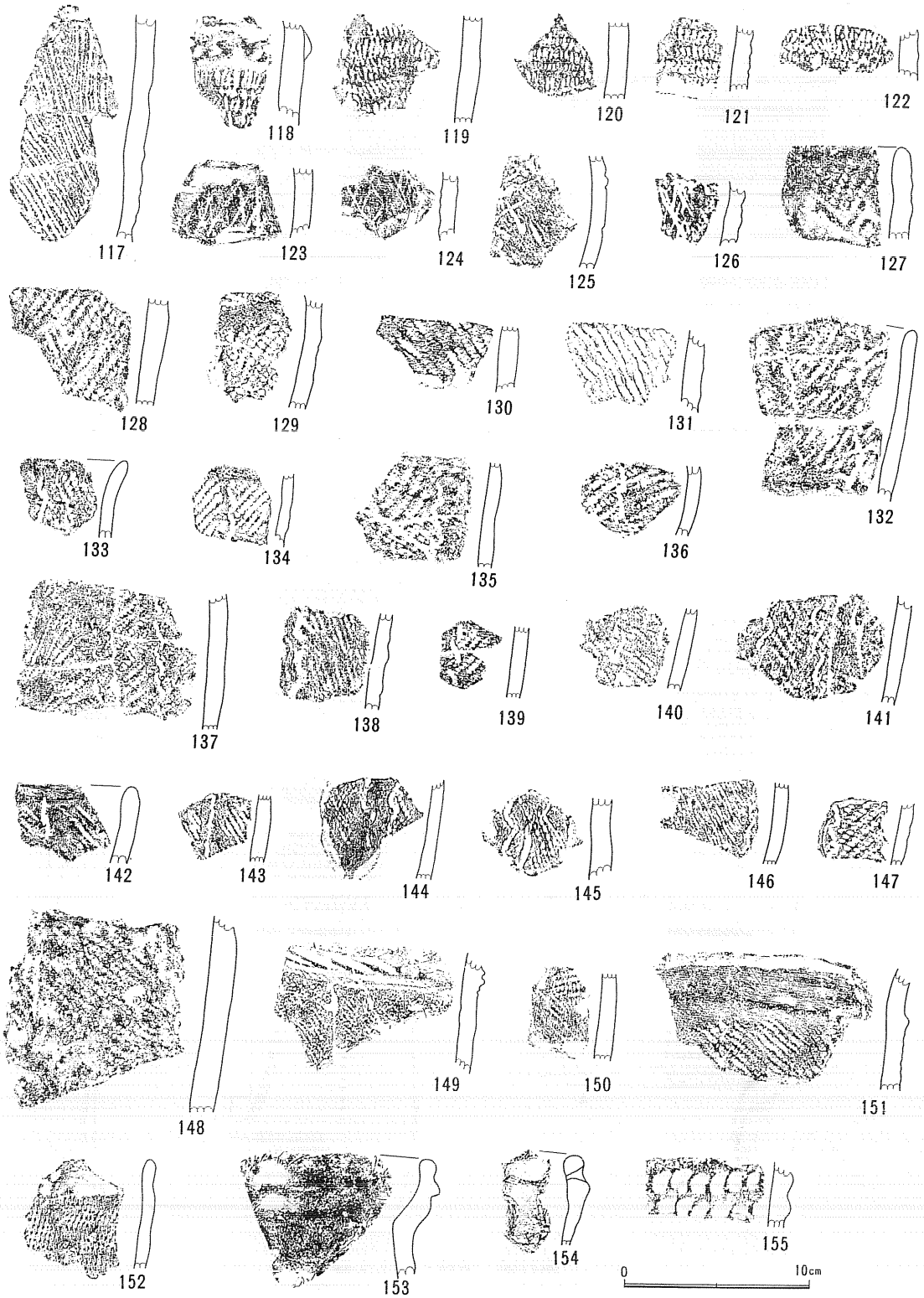
第８類土器（第19図103～108）

器形は大形の深鉢形を呈するものと思われる。半截竹管による平行沈線文と、その間に同じような工具（半截竹管）によって爪形文を施した土器である。

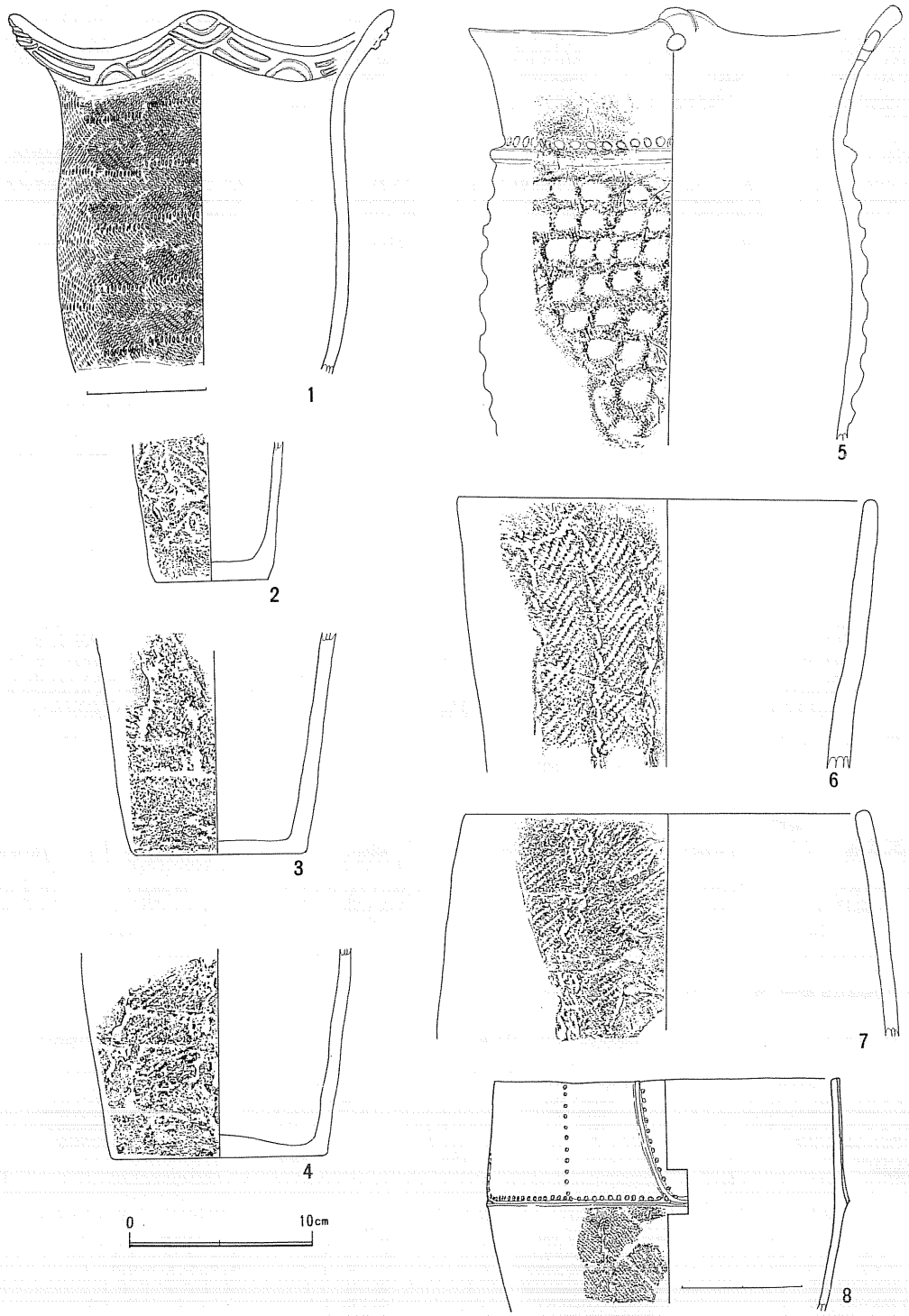
第９類土器（第19図111～116、第21図２）



第19図　遺構外出土土器



第20図　遺構外出土土器



第21図　遺構外出土土器

器形は小形の深鉢形を呈するものと思われる。細い沈線で葉脈状文を施したものである。器壁は他のものより薄く、土器全体が黒いのが特徴的である。

第10類（第20図 118～122）

器形は口縁が少し外反する深鉢形を呈するものと思われる。文様帯等の構成は第４類と同様と思われる。胴部の文様が多軸絡条体である。

第11類土器（第20図 123～126）

器形は第10類と同様である。胴部の文様が単軸絡条体による網目文を施した土器である。

第12類土器（第20図 128～131、149）

胴部の破片で縄文のある土器である。128～129はLR、130・131はRLで、31は無節のものである。

第２群土器

第１類土器（第20図 132～148、第21図３、４、６、７、第23図17、18）

器形は第21図６、７のように外反する深鉢形と少し内反する深鉢形とがある。縄文が主体で原体の縄の端を結んだものを縦に回転させて縦位に走る連続Ｓ字文を施した土器で、結びの違いにより逆Ｓ字になる文様もある。

第２類土器（第20図 151～153）

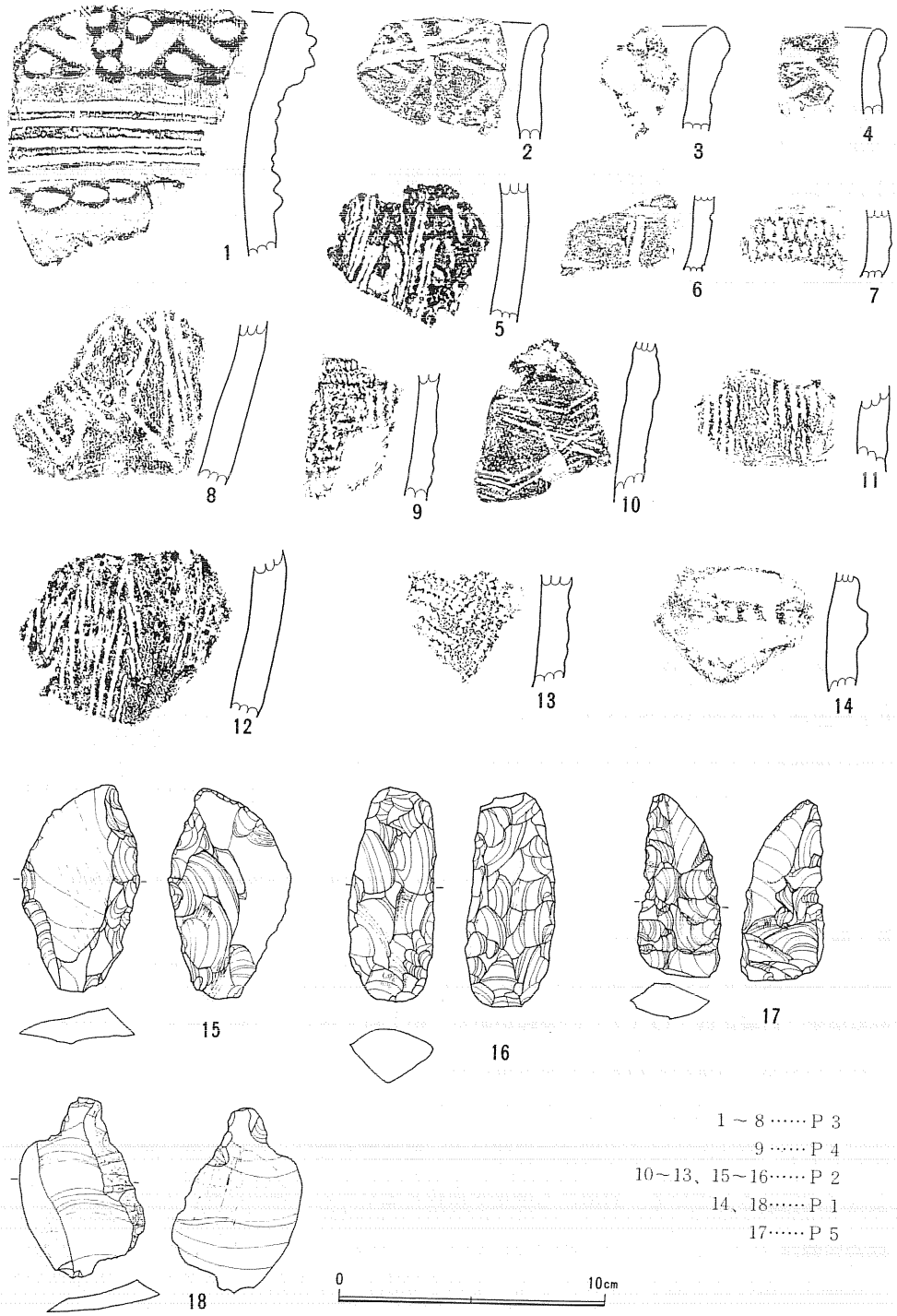
器形は深鉢形を呈すると思われるが、口縁は153のようなものもありバラエティがあると思われる。151は口縁部に無文帯があり胴部は縄文である。152は口縁部が剝落していて不明だが口縁に近い所から撚糸文を施した土器である。153は口縁部の巾の広い無文帯があり、一部に上下からつまんで実出させたような小実起がある。胴下半分まで無文か否かは不明。

第３類（第20図 155、第21図５、８）

器形は第21図の５でわかるように口縁部が外反し、頸部が少しくびれ胴部が少しふくらむ深鉢形を呈す。口縁には二つ（？）の突起がある。粘土紐をねじった感じをそのまま残し、その下に貫孔がある。口縁から頸部まで無文帯、肩部に隆帯をめぐらし、その直ぐ上に円形の刺突文を施し、胴部には指頭の押圧で凹ませた文様が全体に施されている。第20図 115もこれと同じ仲間である。第21図８は５と同様口縁部に広い無文帯を設け、それを細い隆帯と円形刺突文によって四区画されている。肩部にも隆帯が横位に走りその下胴部は縄文である。

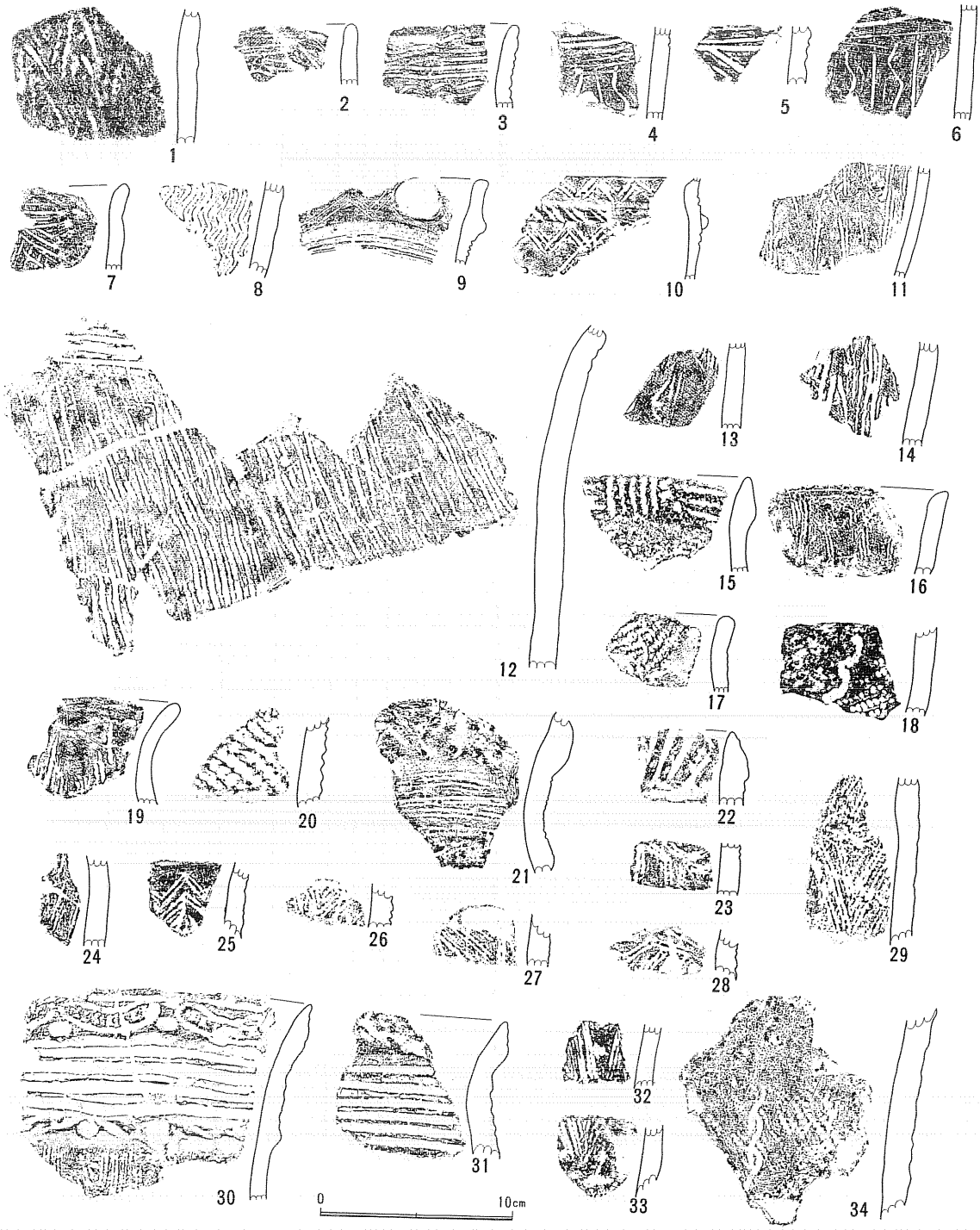
底部の破片

土器底部の破片は全部で86点出土した。それを観察すると木葉痕のあるもの、笹葉痕のあるものなどがあるが、時期は不明である。なおそれらの破片から底部の直径を測定した結果が第24図のグラフである。これを見ると底部の直径が６㎝以下は４点と少なく、12㎝前後に集中していることがわかる。



1～8……P 3
9……P 4
10～13、15～16……P 2
14、18……P 1
17……P 5

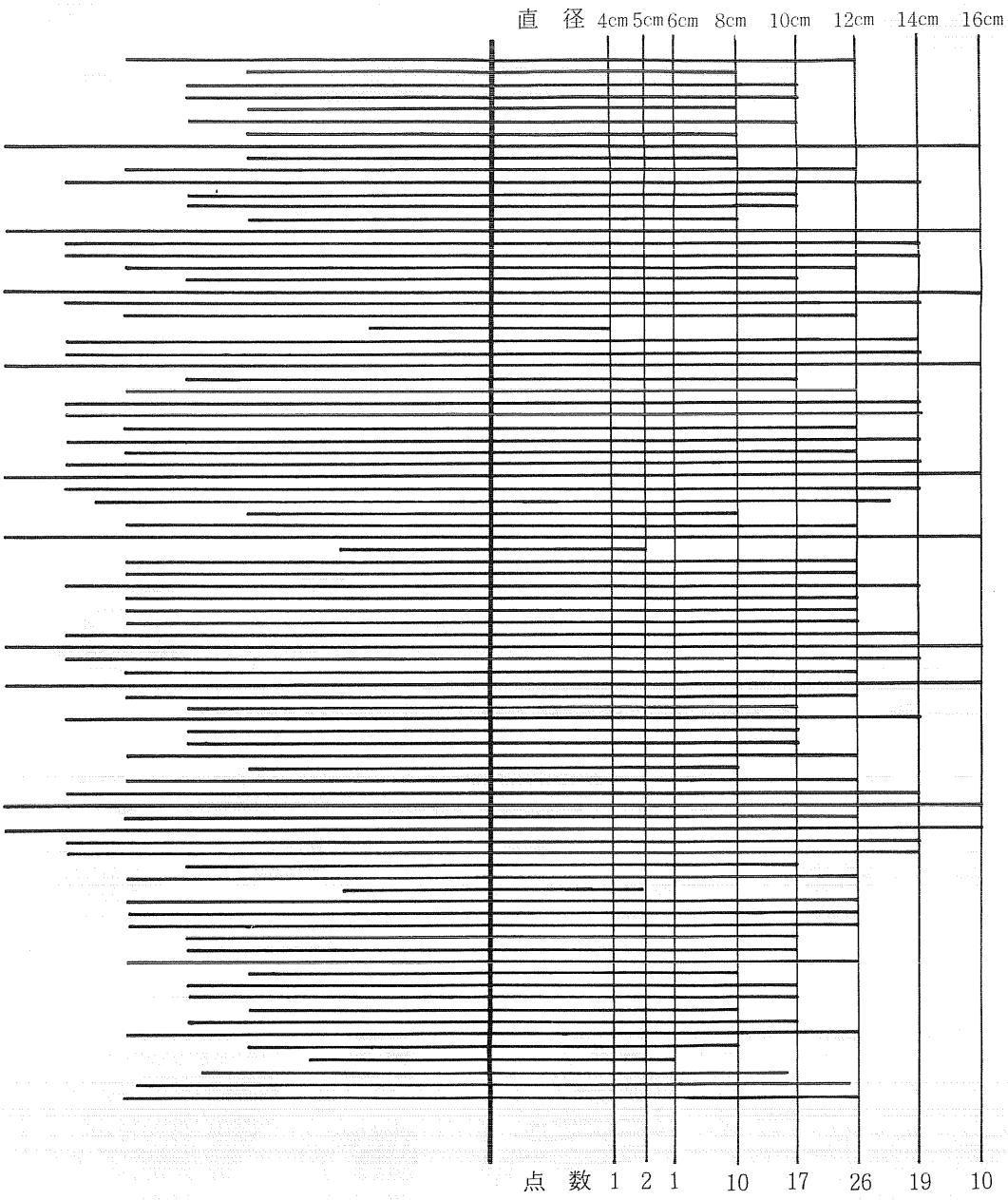
第22図　柱穴内出土遺物



第23図　柱穴内出土遺物

1……P 5　2～8……P 6
9～11……P 7　12～14……P 8
15～16……P 9　17～18……P 10
19～20……P 11　21～29……P 12
30～33……P 13　34……P 14

グラフ　土器底部の大きさ



石　器（第24図～30図）

石器は各地域から出土した。その出土地と、層位、石質は第１表を参照してほしい。石器の種類は大きく打製石器と磨製石器に区分できる。

打製石器では石鏃、石検、石錐、石匙、石ベラ、掻器、その他である。

石鏃（第24図１～９）

１～５のように無柄のものと、６～９のように槍先に近い形のものとある。

石槍（第24図10～11、12～14）

２点とも欠損していて全体の大きさは不明だが少なくとも10cm前後あったものと推測できる。10の断面はカマボコ状を呈すのも特徴的である。12～13は石鏃とも石槍とも区別しがたいものであるがこの仲間に入れておきたい。

石錐（第24図15、16）

剥片の先端に加工を施して錐としたものである。

石匙（第24図17～、第25図24、26、30図１、６）

17～22、第30図１、６はいずれも縦長の石匙もある。26は全面を加工しているが石匙の特徴である「つまみ」と見えるものがありこの仲間としてよいであろう。23～25は横長のものである。つまみの所にアスファルト等の付着は認められない。

石ベラ（第25図～第27図～43）

縄文時代前期の打製石器の中で、この地方でもっとも多いのがこの種の石器である。大きさそれに断面などからいくつかに細分できる。①27、28のように一方の面に剥離面を大きく残し、断面がカマボコ状を呈するもので大きさも長さ８cm前後のもの。②29、30のように先端が丸味をもって尖るもので断面が厚く、両面加工を施したもの、③②より先端が丸味をおびたもの、大きさは長さ７cm前後で断面が厚く、両面加工を施したもの、④35～37のように先端がノミのように直線的になり基部の方が尖るもので大きさは長さ９cm前後で厚い断面であるもの、⑤38～42のように先端が槍先のように尖ったものなどである。

掻器（第27図24～46、50、51）

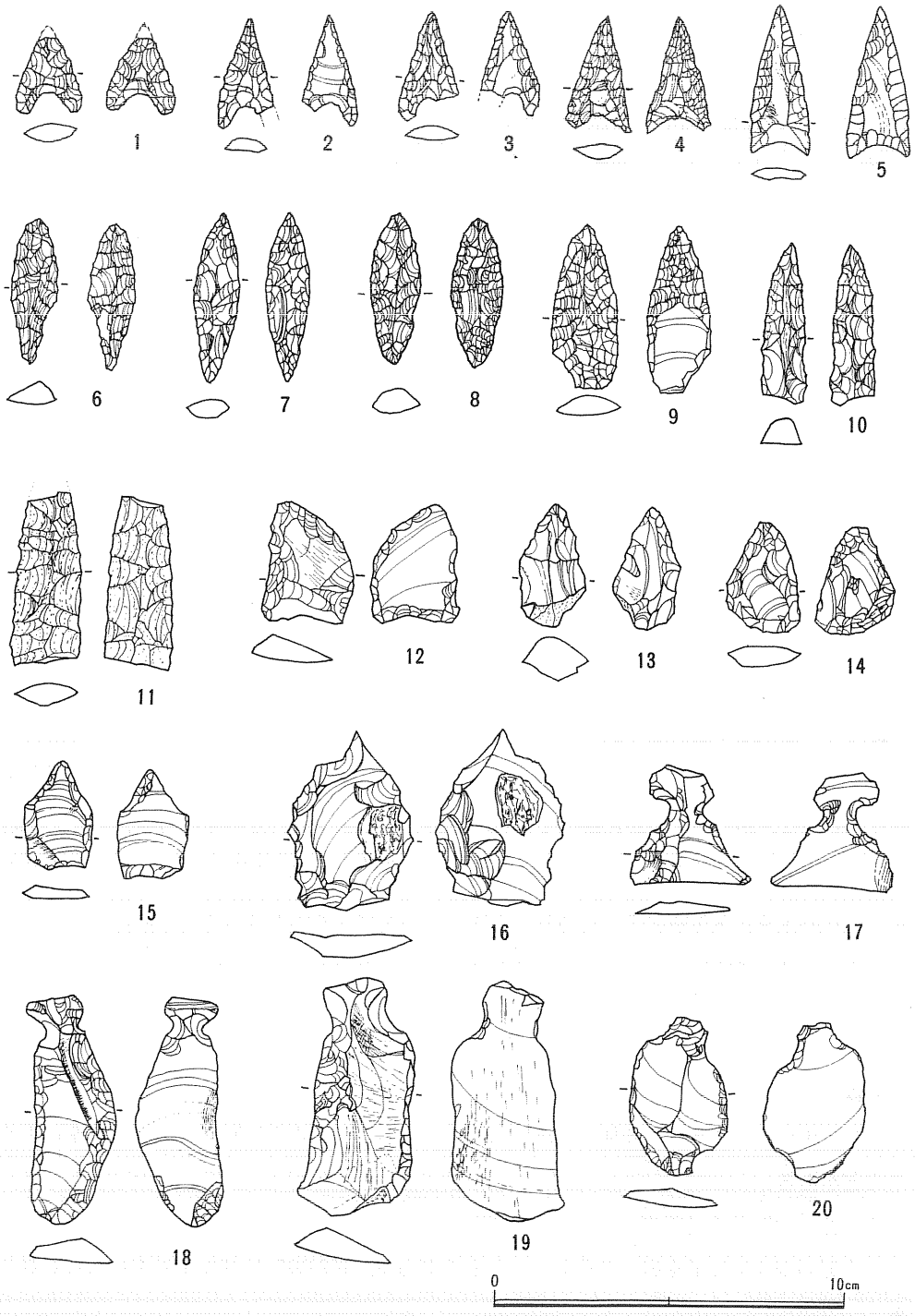
剥片を素材にしてそれに細加工を施した石器で、44、45のように断面カマボコ状を呈するものなどがある。

その他の打製石器（第27図47～49、第28図52～60）

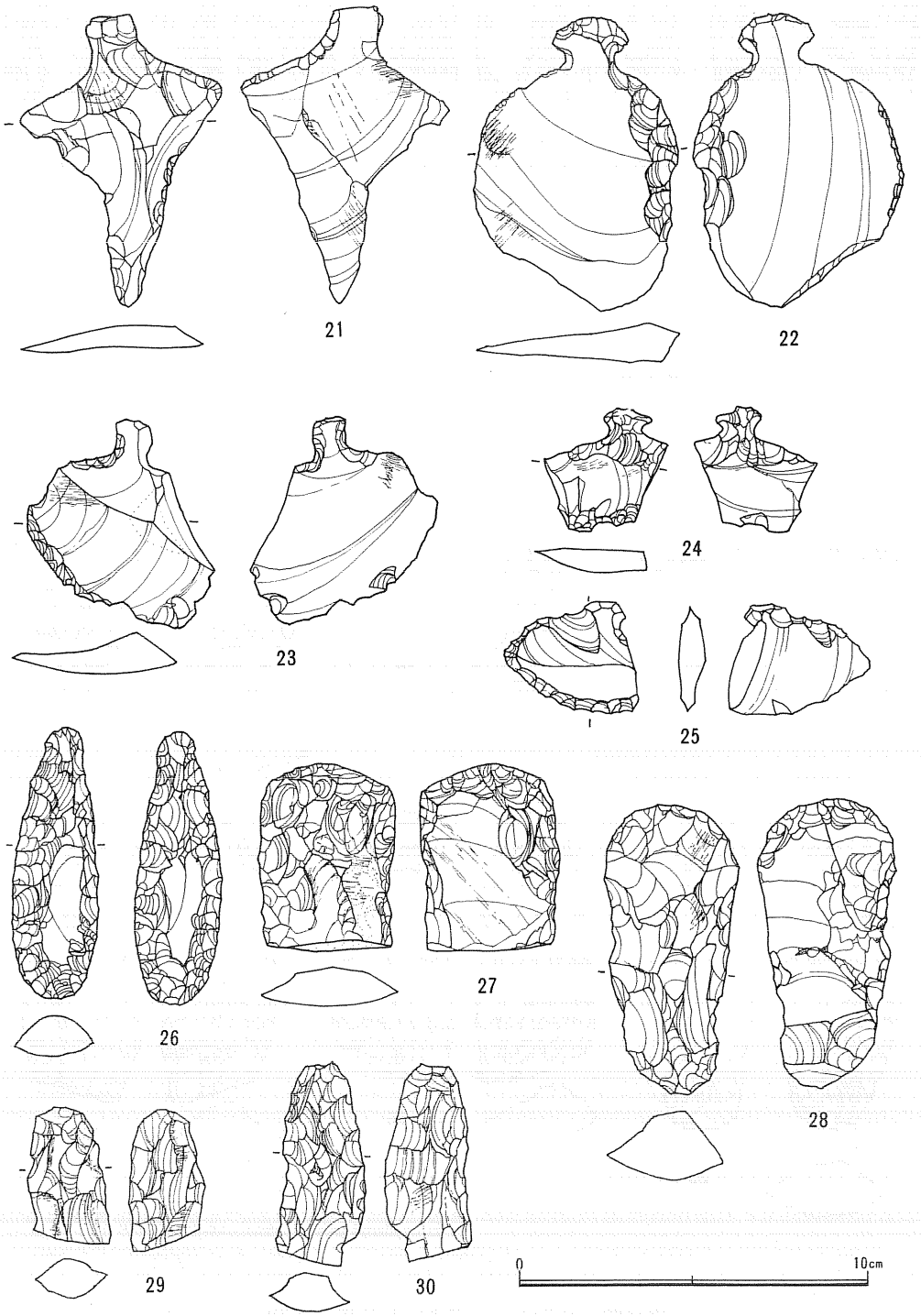
不定形の剥片に加工を施して石器としたものである。第28図54は細加工の施された石器である。

磨製石器外（第29図）

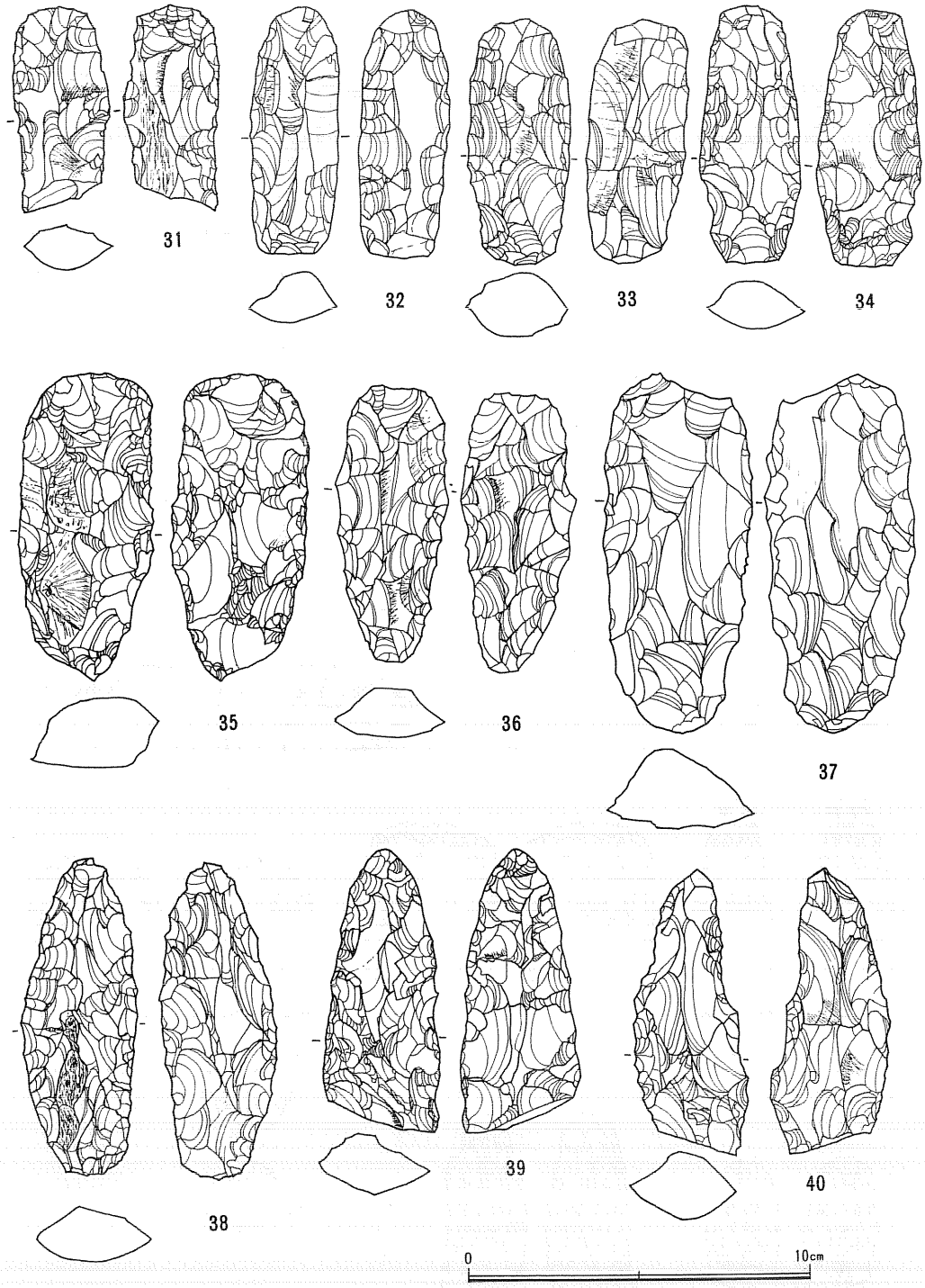
磨製石斧（第29図１～３）



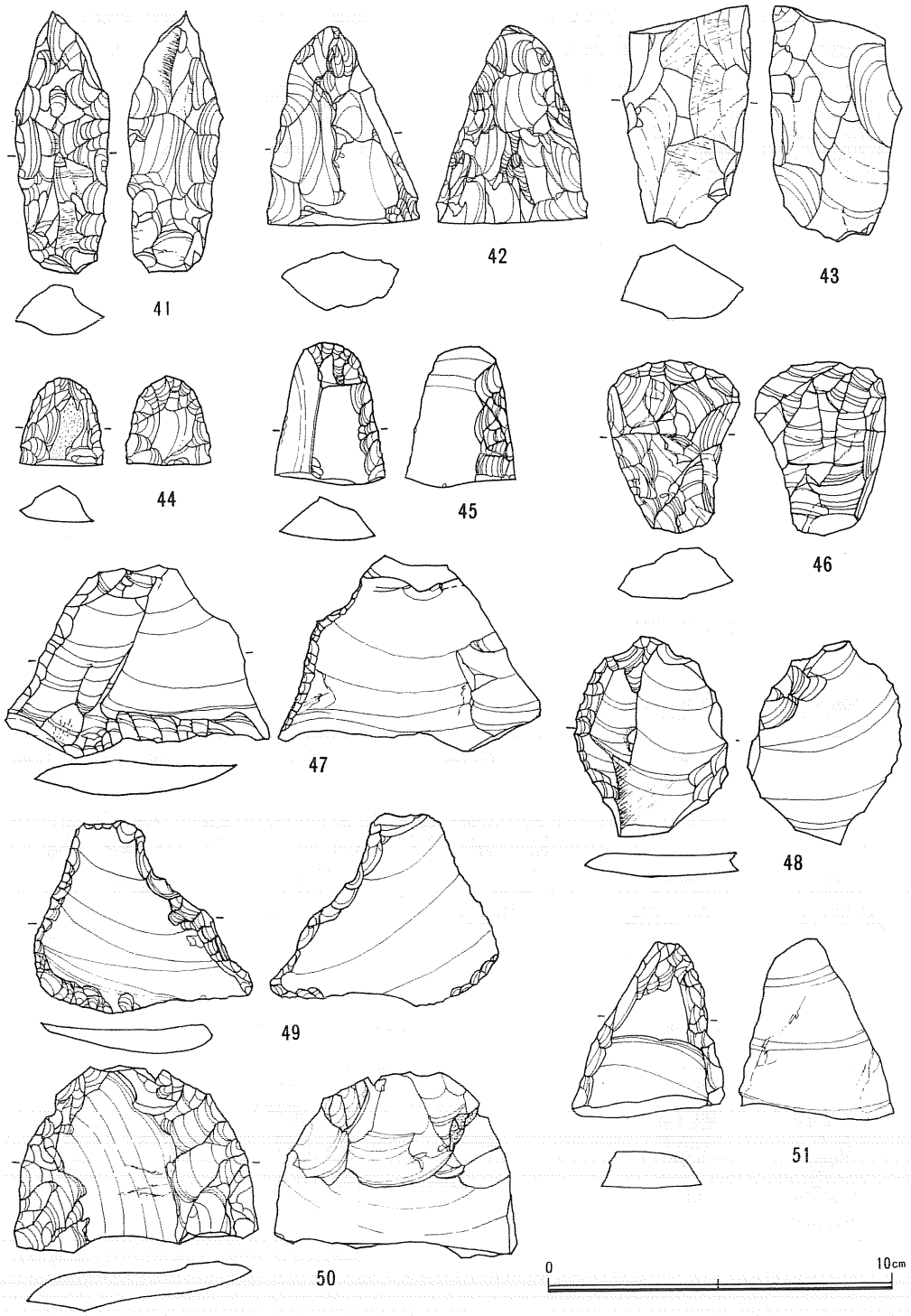
第24図　遺構外出土石器



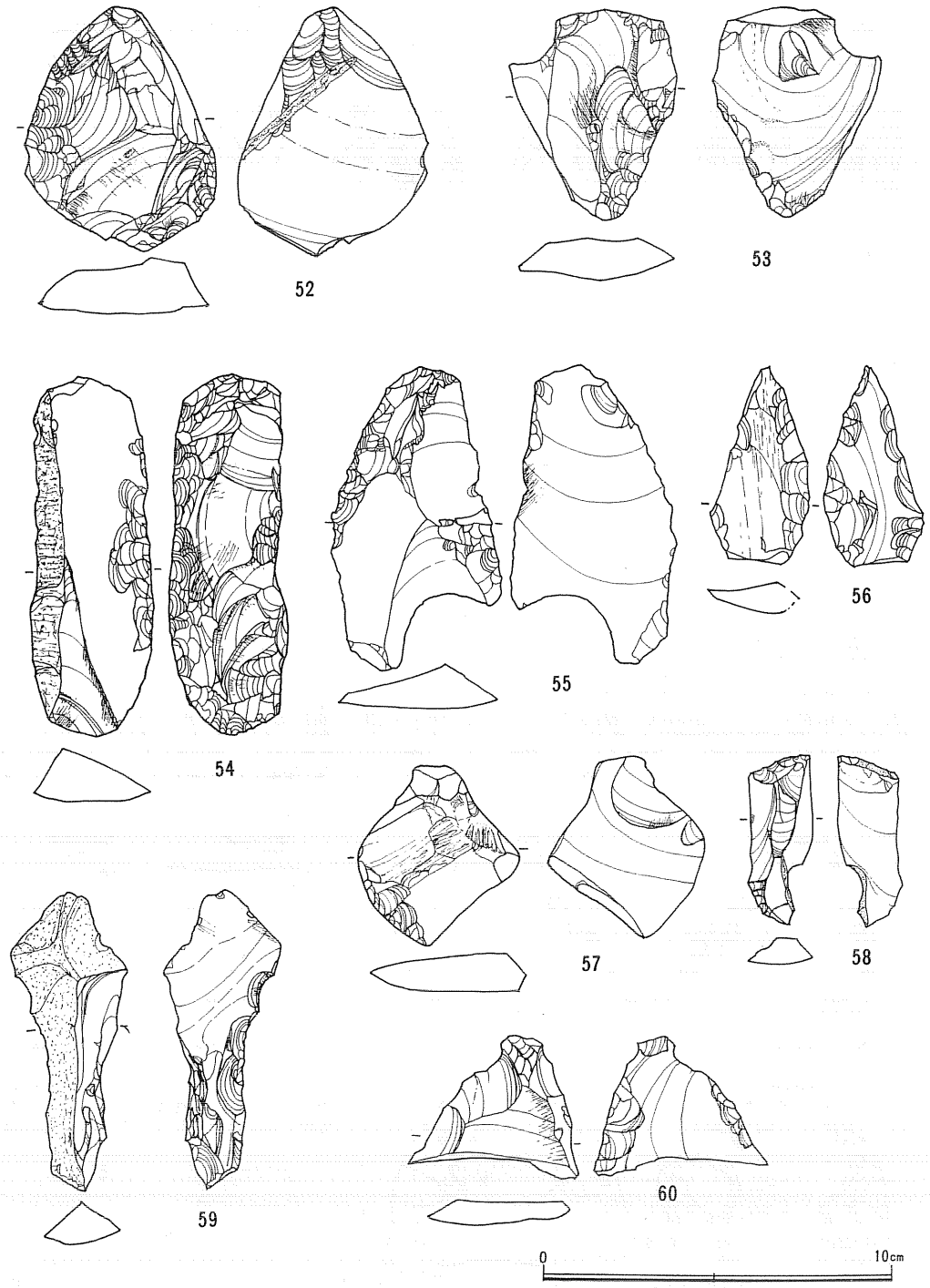
第25図　遺構外出土石器



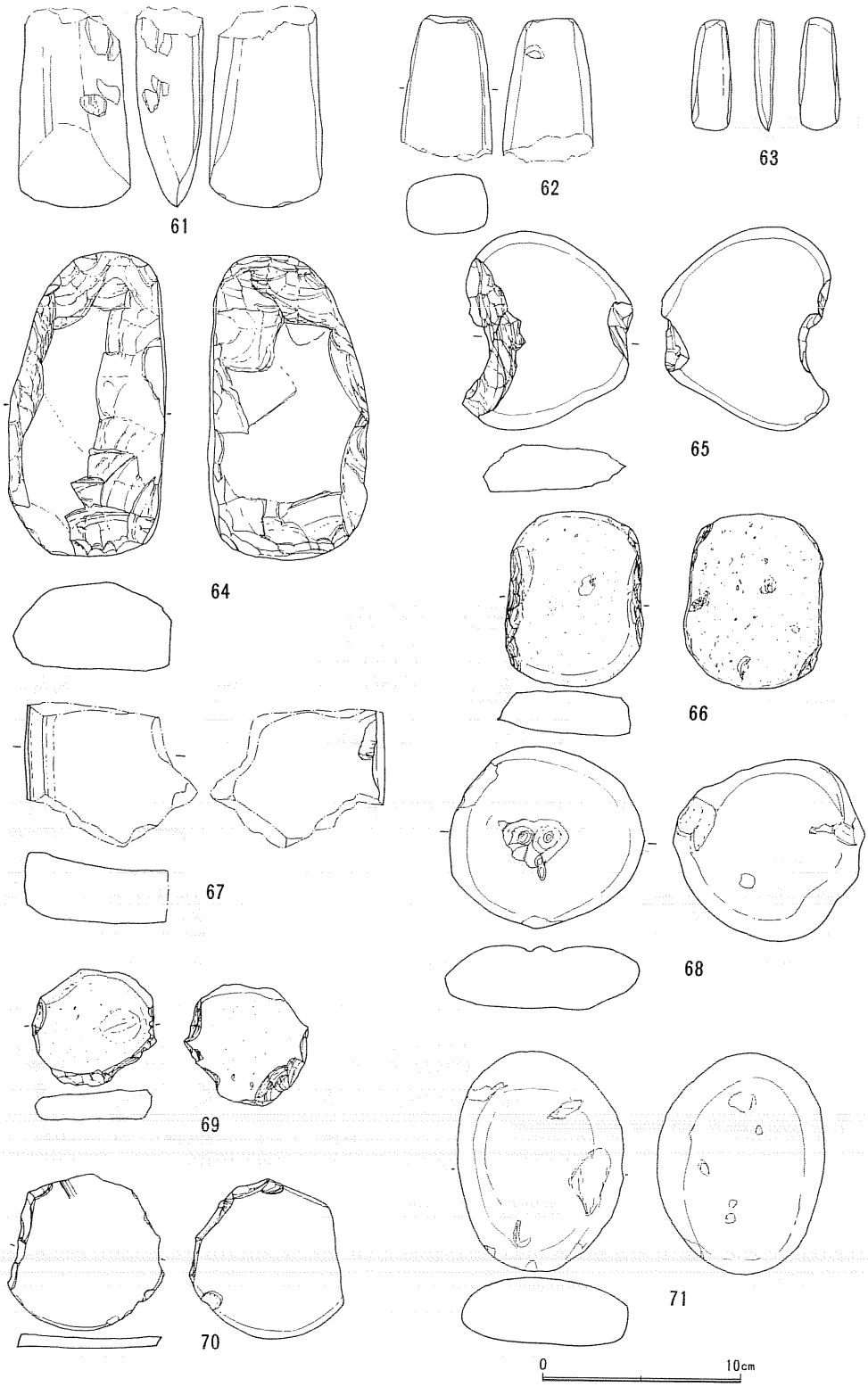
第26図　ＳＫ01～04実測図及び出土遺物



第27図　遺構外出土石器



第28図　ＳＫ06・ＳＫ08出土遺物



第29図　遺構外出土石器

61～62は欠損している。61は刃部が一見片歯状を呈するのが特徴的である。63も小形であるが同じような刃部を呈す。61～63には擦切手法などの痕跡はない。

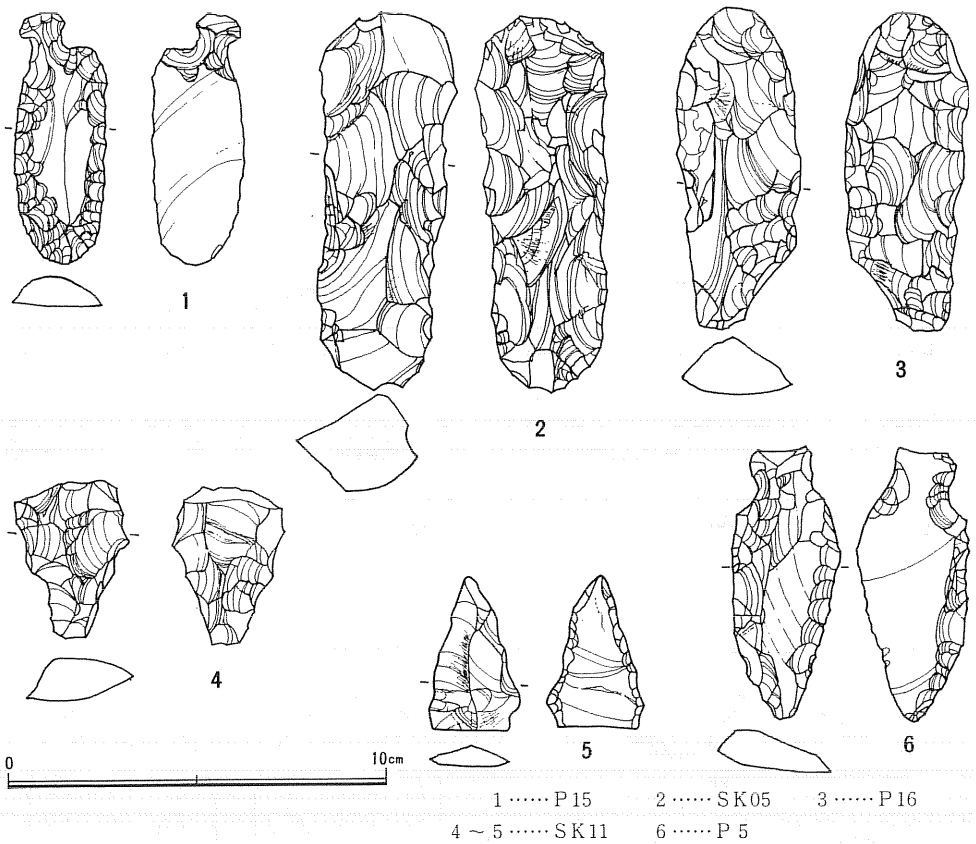
石皿（第29図67）

欠損しているが石皿の端の立あがりがありしっかりした石皿である。

石錘（第29図65、66）

扁平な川原石の両端を打ち欠いて石錘としたものである。一般には長軸の両端を打ち欠くのが多いが、この石錘は短軸の両端を打ち欠いて石錘としているのが特徴的である。

その他の石器、68は凹石、69～70は円盤状石製品、71は磨石、64は円筒土器に伴う半円形扁平打製石器に似ているが、これは直線的になっている側面を擦ってはいない。



第30図　柱穴内出土石器

表 1　石器出土地等一覧表

図No.	出土地区	出土層	石質	図No.	出土地区	出土層	石質	図No.	出土地区	出土層	石質
1	17	2層	頁岩	25	14	1層下	頁岩	49	4	地山直上	頁岩
2	25	1層下	〃	26	3	地山直上	〃	50	19	地山直上	〃
3	20	1層下	〃	27	5	2層	〃	51	29	地山直上	〃
4	16	2層下	〃	28	2	2層	〃	52	15	1層下	〃
5	2	3層	〃	29	6	2層	〃	53	9	1層下	〃
6	17	1層下	〃	30	16	1層下	〃	54	6	2層	〃
7	17	2層下	〃	31	表採		〃	55	4	地山直上	〃
8	17	2層	〃	32	18	2層	〃	56	8	1層	〃
9	17	1層下	〃	33	23	1層下	〃	57	9	1層下	〃
10	5	2層	〃	34	17	2層	〃	58	20	3層	〃
11	P17		〃	35	17	1層下	〃	59	17	地山直上	〃
12	14	1層下	〃	36	13	3層	〃	60	13	地山直上	〃
13	15	1層下	〃	37	14	1層下	〃	61	8	1層下	安山岩
14	17	2層下	〃	38	18	2層	〃	62	5	地山直上	緑色凝灰岩
15	14	2層	〃	39	4	地山直上	〃	63	16	浅い落込み	〃
16	17	2層下	〃	40	17	2層	〃	64	SI01	埋土	
17	17	1層下	〃	41	3	地山直上	〃	65	P 5		
18	18	2層	〃	42	16	1層	〃	66	21	1層下	安山岩
19	29	1層下	〃	43	18	2層	〃	67	20	3層	〃
20	20	地山直上	〃	44	16	1層下	〃	68	表		
21	14	1層下	〃	45	15	地山直上	〃	69	31	1層下	安山岩
22	14	2層	〃	46	18	1層下	玉ズイ	70	20	3層	〃
23	5	地山直上	〃	47	15	地山直上	真岩	71	20	3層	石英粗面岩
24	2	3層	〃	48	16	1層下	〃				

第5章　ま　と　め

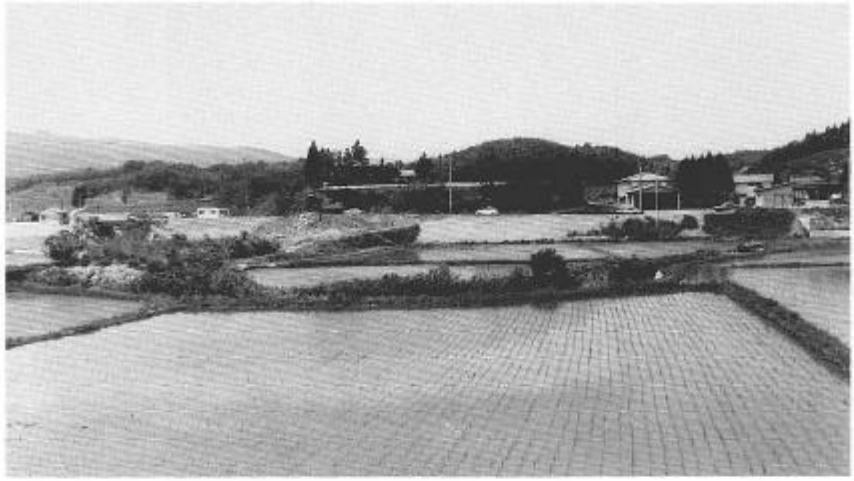
今回の発掘調査は破壊される340㎡の調査だけであったので遺跡全体の様子を把握することはできなかった。しかし縄文時代後期初頭の焼失した竪穴住居跡が確認できたこと、縄文時代前期の土壙が少なくとも10基前後確認できたこと、その中でSK12のように今までとは違った形態のものがあることが注目される。他に立派な柱穴が沢山確認された。これは最近の例から見ると大型住居跡の存在を推定させるものである。昨年度の雄物川町教育委員会の発掘調査で長さ15ｍ70㎝、巾５ｍ20㎝の大型住居跡が現実に確認されていることから考えてもその意は強い。

出土した遺物は大きく２時期にわかれる。一つは縄文時代前期末、他の一つは縄文時代後期初頭のものである。縄文時代前期末の土器の中で第４類とした土器が主体をなすと考えてよい。この土器は現在の考えでは大木６式土器の仲間である。これに第５類とした仲間が加わるものと考えられる。第５類の土器は東北地方北部に分布する円筒下層ｄ式の特色をもつものである。また第６類とした土器の撚糸文は円筒土器に多用される文様である。このようなことからこの根羽子沢遺跡では南の大木６式土器と北の円筒下層ｄ式土器とが共存していたことになるのである。これは横手盆地の中央部から南部にかけての新しい事実として認識して行く必要がある。

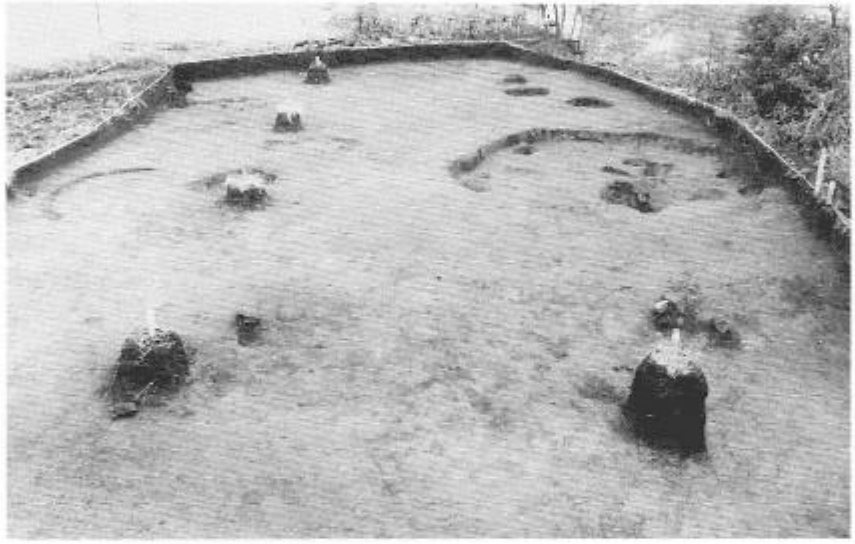
第２群の土器は量が少なく今後検討を要する土器である。第21図５の土器の仲間は遠く新潟県三十稲葉式土器に求めることができるものである。またＳ字状の連続文を縦に施した土器もこの仲間として扱かったが中には前期のものと認めてよいものもあり、今後さらに検討を加える必要がある。

その他に注目されるのは前期末の土器の胎土にドングリ状の木の実（多分ドングリそのものと思われる）を入れた土器片が２点確認されたことである。現在までは富山県や石川県で特徴的におこなわれていたと考えられていたこのことが、秋田県に於いても行なわれていたことが判明したのである。今後注意して土器片を見ることによってさらに資料が増加するものと考えられる。これらの事実から土器作りはドングリの実のなる秋に製作されたのではないかと考えることも可能なのだから大切である。

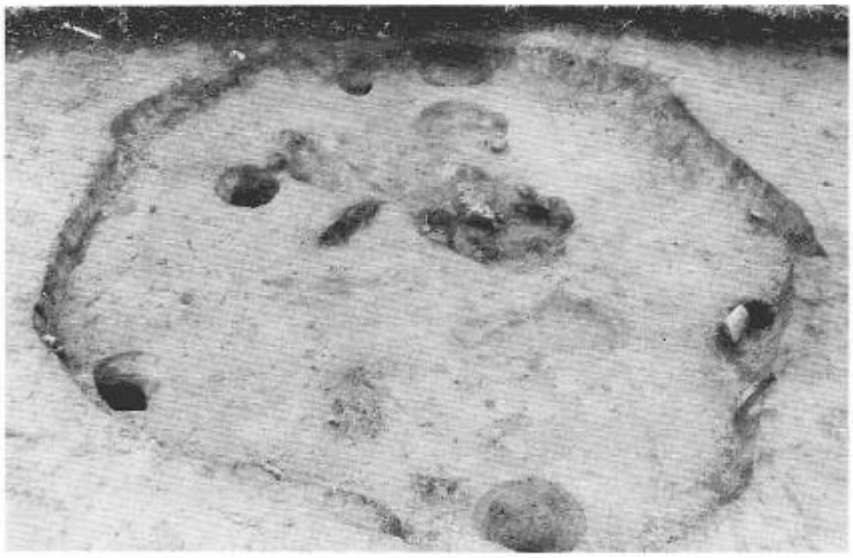
図版 1



遺 跡 遠 景
（南側から望む）

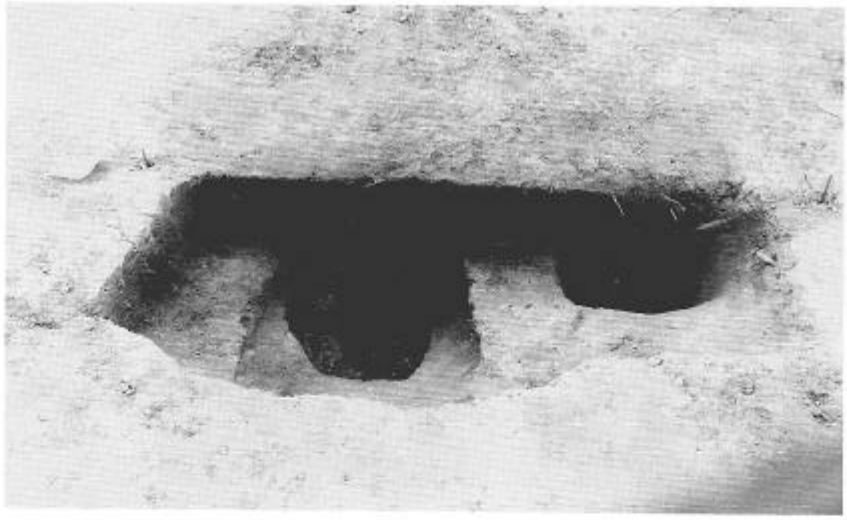


調 査 区 東 側
（西側から）

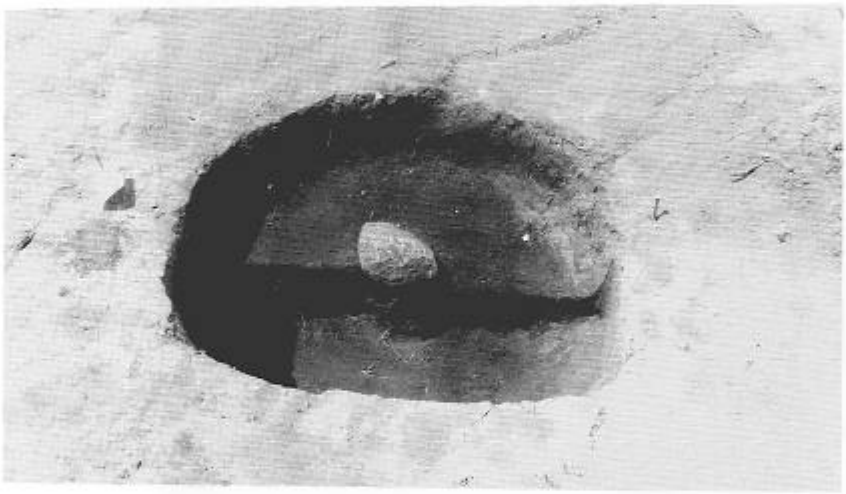


S I 01
（竪穴住居跡）

図版 2



SK01

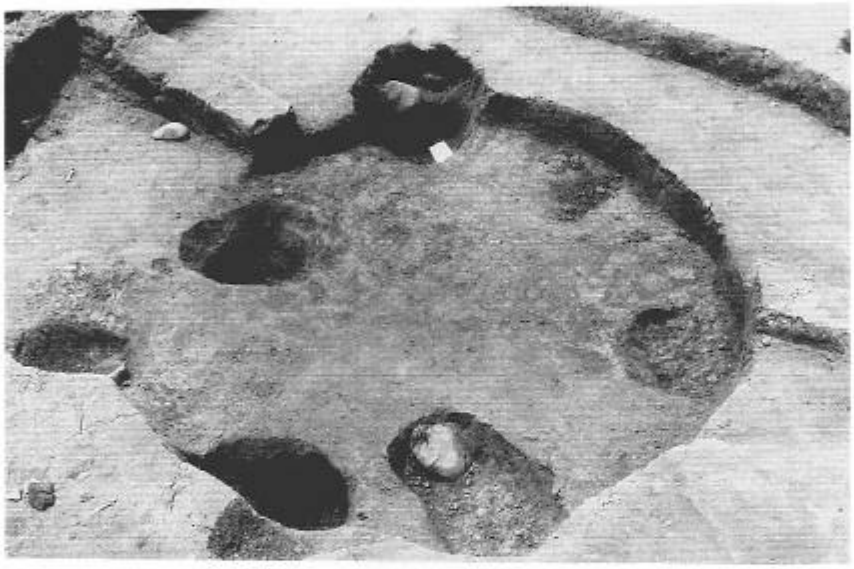


SK02

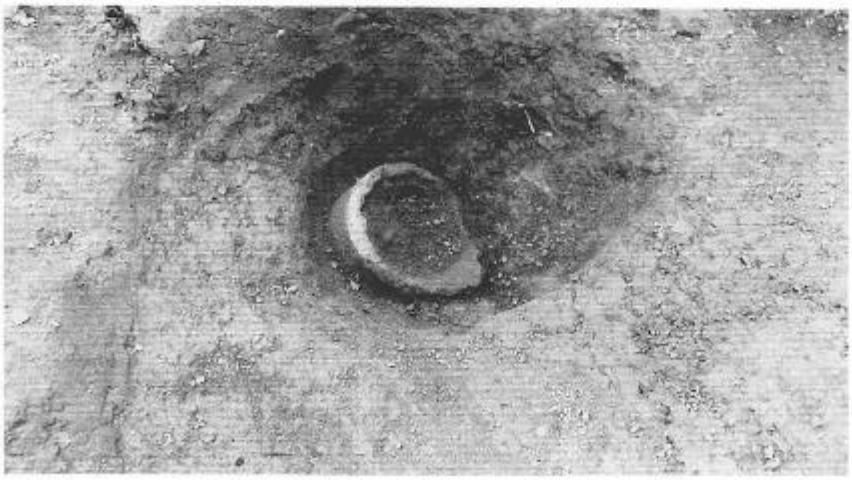
SK07

図版 3

SK09



SK12



SK12
（土器出土状態）